

兵庫津遺跡第79次発掘調査報告書



2021

神戸市

本書は兵庫津遺跡における第79次となる発掘調査報告書です。

兵庫津遺跡は神戸港の前身として古来より開け、文化交流の窓口として今日の神戸の礎を築いた場所といえます。

今回の調査では古代末から中世後半～近世初頭の兵庫津の様子を印す遺構や遺物が確認されました。本書が地域の歴史を知っていただくための一助となり、文化財保護に活用されることを願います。

最後に、現地調査ならびに本報告書作成に際し、ご協力をいただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

2021年3月
神戸市文化スポーツ局

例　言

1. 本書は神戸市兵庫区本町2丁目に所在する兵庫津遺跡における第79次となる埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、神戸市がレオン都市開発株式会社から委託を受け実施した。
3. 現地での調査は令和元年6月3日～同9月6日の間で実施し、神戸市教育委員会文化財課 藤井太郎が担当した。調査区の底地面積は270m²で、遺構検出面数を乗じたのべ調査面積は540m²であった。令和2年度は神戸市西区の神戸市埋蔵文化財センターにおいて図面・写真ならびに出土遺物の整理、金属製品の保存処理などを行い、発掘調査報告書を作成了。
4. 本事業に関する発掘調査及び遺物整理、報告書作成は次頁掲載の調査組織によって実施した。
5. 本書の執筆は出土金属製品については保存科学担当山田佑生が行い、それ以外は藤井が行った。
6. 現地での遺構、遺物出土状況などの写真撮影は調査担当者が行った。出土遺物の写真撮影は杉本和樹氏（西大寺フォト）に委託して実施した。
7. 本書に使用した地図は、「第1回 調査地位置図」に用いた兵庫津の町割り及び街路復元図は阿部功（現神戸市立博物館）が作成したものである。また「第4回 兵庫津と周辺遺跡」には神戸市発行の『神戸市埋蔵文化財分布図』を使用した。
8. 本書に使用した方位・座標は世界測地系第V系座標で、標高は東京湾平均海面（T.P.）で表示した。
9. 発掘調査の実施、整理作業及び本書の刊行に際しては、事業主であるレオン都市開発株式会社ならびに施工業者の住光建設株式会社に多大なるご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

調査組織

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）令和元年度（2019）・令和2年度（2020）

黒崎　直　　大阪府立弥生文化博物館名譽館長

菱田　哲郎　　京都府立大学教授

令和元年度 現地調査

教育委員会事務局

教育長

長田　淳

令和2年度 遺物整理・報告書作成

文化スポーツ局

岡田　健二

教育次長

後藤　徹也

宮道　成彦

文化財課長

安田　滋

安田　滋

埋蔵文化財センター担当課長

前田　佳久

前田　佳久

埋蔵文化財係長

東　喜代秀

東　喜代秀

担当係長

斎木　巖

斎木　巖

〃

松林　宏典

松林　宏典

〃

中村　大介

中村　大介

事務担当学芸員

阿部　敬生

小林さやか

調査担当学芸員

藤井　太郎

藤井　太郎

遺物整理・保存科学担当学芸員

山田　侑生

遺物整理・保存科学担当学芸員

山田　侑生

目 次

序文・例言

調査組織・目次

I. はじめに.....	1
(1) 第79次調査の概要	1
(2) 兵庫津遺跡での調査について	2
II. 発掘調査の成果.....	5
(1) 第1遺構面検出の遺構と遺物	5
(2) 第2遺構面検出の遺構と遺物	12
(3) その他の出土遺物	32
III. まとめ.....	41

報告書抄録

表紙写真

調査地全景（Ⅲ区第2遺構面検出状況）と
西国街道・宮前町大道の痕跡（現道）

裏表紙写真

主な出土遺物



I.はじめに

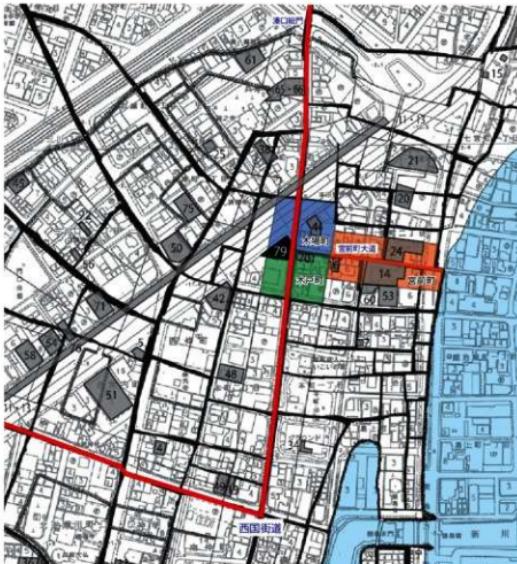
(1) 第79次調査の概要

兵庫津遺跡での第79次となる今回の調査地は、兵庫津を描く現存最古の絵図である『攝州八部郡福原庄兵庫津絵図〔元禄9年（1696）〕』（以下、元禄絵図）では、西国街道と宮前町を貫く街路である宮前町大道の延長部がT字に交差する西国街道沿いの西側で、西国街道を挟む両側町である木戸町、木場町の町境付近に位置する。絵図には街道沿いに町屋、西側には多くの寺院が描かれ、近世初頭以降は西国街道と寺町との間に形成された町屋群の一角となる。

兵庫津遺跡は古代から近世にかけての遺跡である。現神戸港の西部にあたる「兵庫港」一帯に広がり、港は古くから畿内の外港としての重要な位置付けがされてきた。江戸時代後期には人口2万人を擁する都市・港町に発展し、賑わったとされている。

遺跡の範囲は元禄絵図に描かれた近世兵庫津の範囲を基としており、現在東西約1.5km、南北約2.3kmの範囲を埋蔵文化財保蔵地に指定している。六甲山系の山々から流れ出た土砂が大阪湾内を東流する海流により砂嘴を形成し、内湾するその東岸が天然の風待ち港となり、大坂・京方面への中継地とされてきた。古代には僧行基による「大輪田泊」の改修や平清盛による日宋貿易の拠点化、中世の南都大寺二寺による「兵庫津」の管理、近世には北前船・朝鮮通信使の寄港地となり、近代の「兵庫港」へと発展してきた。市街地化が進んだものの、長く継承されてきた港の雰囲気や町割りを今に伝えている。

また周辺内陸部にはそれ以前からの集落遺跡が存在しており、湊川の流れにより形成された扇状地や六甲山南麓の丘陵端部から段丘面にかけて遺跡が立地している。



第1図 調査地位置図
(Scale 1 : 5,000)

今回の調査地と周辺既往
調査地（数字は調査次数）

今回の調査は共同住宅建設に伴う調査で、埋蔵文化財に影響を及ぼす建物部分の調査を実施した。調査は作業工程の関係から調査対象範囲を四分割し、西からⅠ区、中央をⅡ-1区（北側）、Ⅱ-2区（南側）、Ⅲ区として、西側の調査区から順に遺構検出、掘削作業、記録作業、埋め戻し作業を繰り返し行った。

調査地の現標高はおよそT.P.2.2mで、地表面下2.0mまでは盛土、擾乱土が堆積し、その下、T.P.0.2m前後に灰色砂が堆積し、T.P.0.0m前後に浜堤堆積と考えられる灰白色砂が堆積する。周辺での既往の調査では近世～近代にかけての複数の遺構面が確認されているが、今回の調査地ではすでに失われていた。灰色砂は中世の遺物包含層で、その上層に部分的に粘質土や焼土、粘土が堆積していた。コンクリート片が喰い込む箇所なども見られ、盛土や戦災焼土との区別は困難であった。これまでの兵庫津遺跡での調査では盛土などに伊万里焼の染付類が混じることが多いが、今回検出の遺物包含層上層の粘質土からは染付類は全く出土せず、陶器や瓦片のみが出土したことから整地層でも近世初頭頃までのものと考えられる。

遺構面は湧水が著しく、水中ポンプを設置して常時、排水作業を行いながら遺構検出、掘削を行ったが絶えず水が滲む状況は改善されなかった。遺構や出土遺物はすぐに水没し、遺構の下部の状況が不明なものが多い。土層の堆積状況を確認するため調査区を囲むセメント連壁際に畦畔を残していたが、湧水や降雨で流出し十分な観察と記録が行えなかった箇所も多い。

調査区内の浜堤堆積と考えられる灰白色砂面は、東から西へわずかに下がり地形を形成する。調査区中央から西半で湧水が顯著で、南西部に井戸が集中する様子が見えるが、調査区東側にも井戸が並び、調査地全体の下位に湧水層があるものと考えられる。

調査は0.25バッカホーで盛土層を除去し、灰色砂層面（第1遺構面）、灰白色砂層面（第2遺構面）でそれぞれ遺構・遺物の検出作業を行った。

（2）兵庫津遺跡での調査について

兵庫津遺跡の調査は今回で79次を数え、現地での調査は2019（令和元）年度の夏に実施し、本書は2020（令和2）年度の作成であるが、作成段階で兵庫津での調査は86次を数えることとなっており、兵庫津遺跡での開発件数の増加が窺い知れる。それに伴う調査の実施により様々な事象が明らかになっている。本書もその一端を担うことができると考えている。

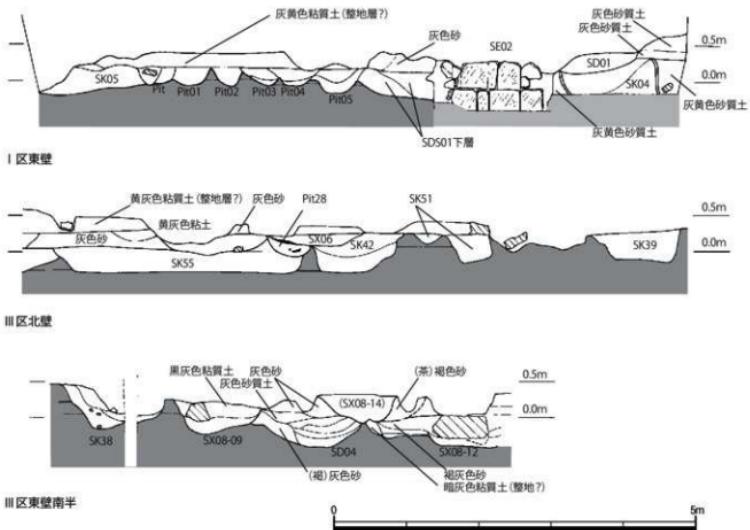
兵庫津遺跡では遺存状況に差はあるものの、ほとんどの調査地では上層から戦前期の生活面、近世末～近代の遺構面、近世期の複数の遺構面が検出され、近世～近代にかけての町屋遺構とそれに伴う多量の遺物が検出されており、調査の中心をなしている。さらに下層で中世の遺構・遺物、わずかながら古代、すなわち律令期に遡る遺構・遺物の検出がある。近年は遺跡範囲の北側で弥生時代～古墳時代にかけての遺構・遺物が確認されており、これらは旧湊川や、特定されていないが旧湊川以前の「古湊川」と称される古い本流や派生する川筋により形成された自然堤防などの微高地に立地するものと考えられる。遺跡の北側、六甲山系から派生する丘陵や扇状地上には大規模な集落遺跡などが立地している。今も残る「三川口町」「永沢町」など地名や古地図に残る地形などからも旧の川筋についての考察がなされている。

これまでに実施された兵庫津遺跡を理解する上で重要な調査を列記する。

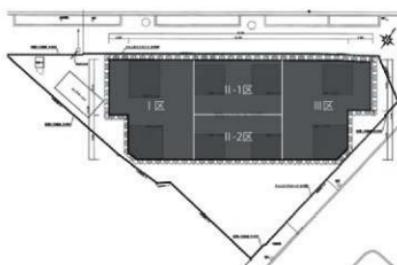
第2次調査は須佐の入江の痕跡と町場の形成、拡張の様子が確認され、兵庫津遺跡において大規模調査が実施された嚆矢となる画期的な調査であった。

第14次・20・21次調査では北浜地区での町屋の変遷が丁寧に調査され、水帳、水帳絵図との比較検討により町屋の構造を知る上で重要な調査となった。

兵庫県教育委員会が実施した国道2号線における共同溝設置に伴う第11・13・15次調査は、兵庫津遺跡の北部の様子を東西に縦貫する長い調査地で確認した画期的な調査であった。とくに中世の倉庫と考えられる遺構などの検出とともに多量の遺物が出土し、中世期の土器編年に供する様々な資料が得られた。また近世～近代の佐比江の舟入が特定されるなど港施設の位置の確認など絵図と比較をする上で重要な発見があった。



第2図 調査区土層図（主要部分）（Scale 1: 60）



第3図 調査範囲及び調査区割図



第4図 兵庫津遺跡と周辺の遺跡
(Scale 1 : 30,000)

第26次調査では真光寺の旧境内北東隅の堀の位置が確定され、元禄絵図との照合に有用、かつ重要な調査となつた。

第32次調査でははじめて奈良時代後半の溝が検出され、港施設に関わる遺構と考えられた。

第35・37次調査で兵庫城（勤番所）の石垣の一部が確認され、その後、第57・62次調査において兵庫城の築城当時の石垣及び築城時の町場の様子が確認された。後の勤番所時代の堀の埋め立ての様子や町場の拡張の痕跡も検出された。

また遺跡の北西部で、元禄絵図で寺町とされる地域を中心に土師器皿を多数投棄、あるいは埋納した土坑など中世の特徴的な遺構が検出されている。今回の調査のように下層に調査深度が及ぶと湧水も激しく、遺構面の詳細な状況が判断しにくい状況となる。上層の近世の遺構も複雑に錯綜し、下層まで及ぶものも多く峻別が難しくなる。兵庫津遺跡では町屋で頻繁に整地や改築が行われており、検出遺構の時期決定が困難な遺跡である。

II. 発掘調査の成果

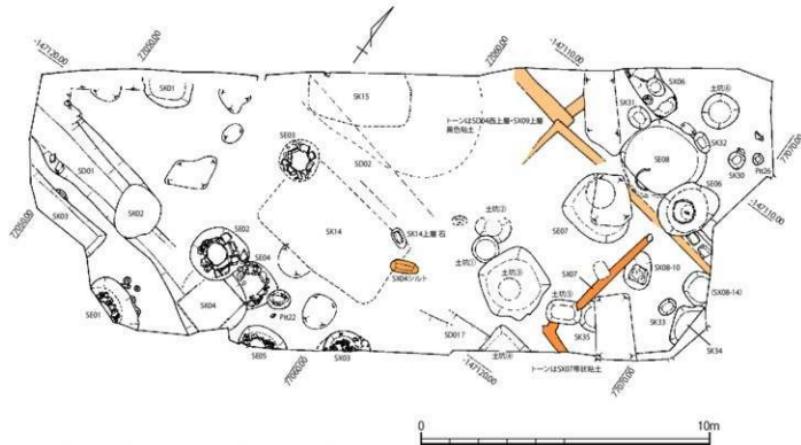
今回の調査では盛土を除去するほとんどの部分で灰色砂面となるが、部分的に粘質土が堆積しており、整地層の一部と考えられる。中世の遺物包含層である灰色砂面で遺構として認識できたのは、上層の近世～近代の溝や井戸、土坑など比較的掘削深度の大きな遺構の下部と整地面に伴う遺構である。ほかに柱穴や土坑などの遺構が重複しながら見えはじめるが、明確に各遺構の輪郭を検出できるまでには至らない。灰色砂が残る部分も層の厚みにばらつきがあり、灰色砂の堆積が薄い部分では第2遺構面を形成する浜堤堆積の灰白色砂が見えはじめ、灰色砂上面に形成された遺構も判別しやすくなる。ただ遺物包含層と遺構埋土の違いも明確でなく、ほとんどの遺構を第2遺構面で検出した。第1遺構面、第2遺構面との差が明確でない箇所の方が多い、出土遺物も帰属面が厳密に把握できない状況で、上層での古相を示す遺物の混入や逆に下層からも後出する時期の遺物の出土があり、上層遺構の掘り残しが多く、時期決定が困難な状況であった。

今回の調査では12世紀後半から18世紀代の遺物が出土した。遺構の時期は上記の調査状況から細分が難しかったが、まとまりとして大きくは12世紀後半～13世紀、15世紀後半、16世紀～17世紀前半、18世紀頃の4時期の遺構・遺物を検出したと考えられる。

また調査地全体では調査区の東西両端で遺構を多く検出しており密度が濃く、中央部分は少なく、希薄であった。

(1) 第1遺構面検出の遺構・遺物

灰色砂上面で明確に検出できたもので、上層からの落ち込みの残り、整地層面に伴う遺構と考えられるものを列挙する。調査区の東半と西端で部分的に整地層を検出した。本来は全面に括がっていた可能性が高いが、それぞれ形成された時期は異なるものと思われる。溝、土坑、井戸、整地面の遺構について調査区の西半・東半として概要を記す。



第5図 第1遺構面平面図 (Scale 1:150)

調査区西半の状況

溝

調査区の南西部で溝SD01を検出した。幅約2.0m、深さ0.2m、調査区内での検出長は約9.0mである。調査区西壁の堆積状況から整地層と考えられる灰黄色粘質土面の遺構と思われる。灰黄色粘質土の本来の厚さは不明であるが、残りの良い部分で厚さ0.2mを測る。溝の深さは0.2mほどである。埋土は暗灰褐色粘質土で陶磁器片、瓦片が出土した。東側のSE02やSE04など井戸が集中する付近での溝の形状は不明瞭だった。

これに並行して調査区中央北側のII-1区でも同じく東西方向のSD02を検出した。溝としたが暗灰色砂が帶状に堆積するもので、層の厚さは0.1~0.15m、遺構の南北に大型の落ち込みであるSK14とSK15がある。SK15と接する西端の部分は変色し硬化していた。溝としたが明確な落ち込みとは捉えにくく、遺物包含層が土壤化した痕跡の可能性もある。宮前町大道の延長線上、位置的に町境と想定されることから路地の痕跡なども考えられたが、積極的にこれを肯定するものではない。やや硬化した面を持ち周囲と異なっていた状況のみ記しておく。

SD01の南側でSK03を検出し、SD02の南側ではSK14の輪郭が見えるが、不明瞭であった。いずれも平面形が長方形と思われる土坑が溝に沿うように掘削される傾向が窺える。SK15の平面形はさらに不明瞭で、円形に北側に拡がり、深くなるものと推測される。東側には下層遺構で集石遺構としたSX02があり、これもSK15と同様、北側へ下がり地形を形成する。



写真1 I区SD01 (北西から)



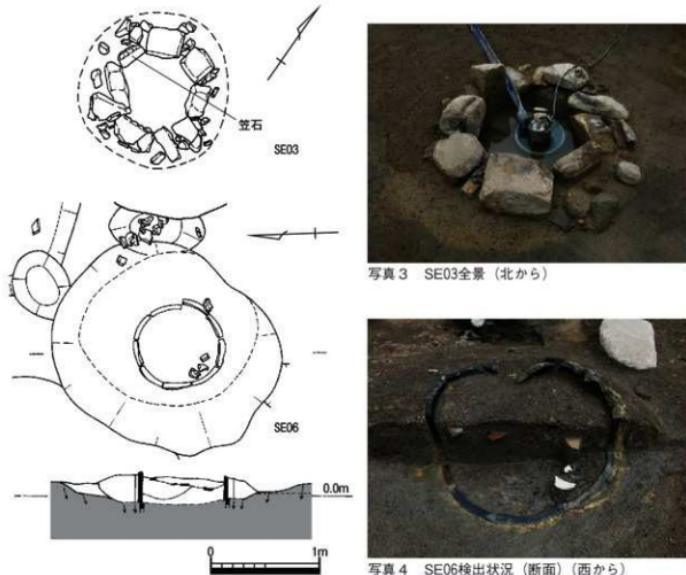
写真2 II-1区SD02検出状況 (北西から)

井戸

調査区西半でSE01~05の石積み井戸5基を検出した。掘形はいずれも平面円形で、径1.5~2.0mを測る。SE02は一辺50cmほどの花崗岩の石材の片側を半円形に削り抜き、曲線部を揃えて円形の井戸側とする。井戸側の内径は約0.7mである。そのほかの井戸は拳大~人頭大の石を積んで井戸側とし、SE03には石塔の笠石が転用されていた。湧水のためすべての井戸で底まで完掘できなかったが、SE03では検出した石材が基底石と考えられ、浜堤堆積である灰白色砂面から下がったT.P.-0.2mが井戸側底と考えられる。集水施設などは検出していない。湧水量は豊富で検出面でも十分に水が湧く状況であった。

土坑

調査区西半で検出したSK01～04の土坑も井戸や水溜めの可能性が高い。SK01・02は平面円形、SK03は長方形の浅い落ち込みと考えられる。SK04には木質の痕跡と考えられる幅1.0cmの細い粘土が方形に巡る。SE02が近代、その他は近世の遺構と考えられる。



第6図 SE03・06平・断面図 (Scale 1 : 40)



写真5 井戸側材 (SE03笠石・SE06瓦)

調査区東半の状況

調査区内は東側が地盤的にわずかに高い。整地層の可能性のある黄灰色粘質土の堆積を調査区北東部で検出した。上面で幅0.1～0.3mの帯状の黄白色粘土が直交する箇所を検出した。何らかの区画に伴うものと考えられる。上層遺構である井戸などによる搅乱を受けるが、柱穴や土坑、カマドを検出した。南東部では帯状の粘土の堆積SX07とその内側では一辺60cmほどの大型の礎石と考えられる石を検出した。帯状粘土と礎石については後述する。

井戸

調査区東半では一辺、または径2.5mほどの井戸SE06～08の3基を検出した。南北に並ぶ。湧水のため完掘できなかったがSE06・08は瓦積みの井戸、SE07は素掘りの井戸で集水桿の曲物の輪郭を確認した。

井戸に近接する土坑①～⑥からは近世～近代の陶器片、瓦片が出土したが、コンクリート片が出土するものがある。搅乱と重複するか、近現代まで使用された井戸と思われる。



写真6 SE04・06・07・08及びSD01出土遺物

SE06から染付碗や擂鉢の破片、SE07から陶器片が出土しており、2基の井戸は18世紀代のものと考えられる。SE04・SE08から出土した遺物は17世紀代までのもので、2基よりも古い井戸と考えられる。また西側SD01からは伊万里焼染付皿の破片が出土しており、18世紀代のものであろう。

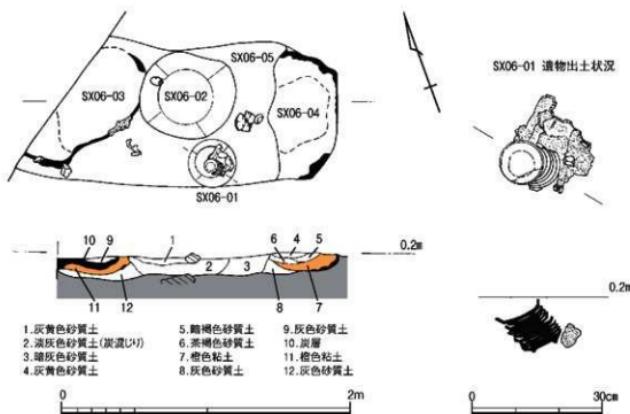
ピット

調査区北東部でピットを検出したが、灰色砂面で掘形が明確なものは少なかった。検出したピットの規模は径0.2～0.3m、湧水により深さは0.2mほどが確認できた。下層第2遺構面でも同じ位置でピットを検出しており、別遺構と考えるよりは底部が明確に検出できていなかったものが多いと思われる。遺物は土師器皿や陶器、瓦の破片などが出土した。この他に一辺30cmほどの石が出土した。礎石か礎盤かは明らかでなく、ピットも合わせて並びを検討したが、今回の調査範囲では建物などに復元はできなかった。

調査区西半では上部に人頭大の石が据えられたPit14・22を検出した。Pit22の上層からは瓦片1点が出土し、下層から瓦質土器鍋1つが出土した。鍋は下層遺構に伴う可能性が高い。

カマド

Ⅲ区北西部で検出したカマドSX06は幅1.0m、調査区内での検出長約2.0mで調査区外、西に延びる。検出範囲の両端で火床と考えられる頗著な被熱痕SX06-03・04を検出した。間は不定形な落ち込みSX06-05により削られている。SX06-05が埋没した後、周囲に薄く炭が堆積する平面円形の落ち込みSX06-02とピットSX06-01を検出した。ピットSX06-01からは陶器皿10枚が重なって出土した。火床を切り込むSX06-05からは土師器皿や備前焼壺、漆椀、鉄製品が出土した。当初はカマドの基底部の堆積と考えていたが、断面観察によりカマドを切り込む遺構と判断される。上層に伴う遺構の可能性もあるがカマドの位置を大きく変えるものではなく、造り替えなど何らかの関連する痕跡と考えられる。



第7図 SX06平・断面図 (Scale 1 : 30) 及びSX06-01遺物出土状況 (Scale 1 : 10)

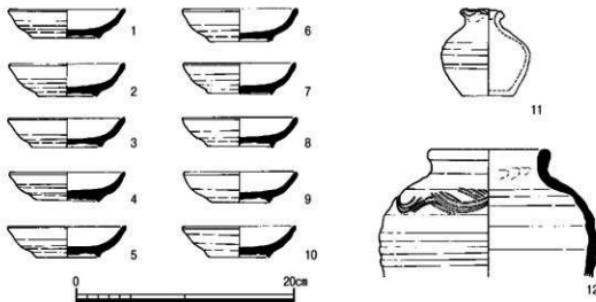


写真7 SX06検出状況（西から）



写真8 SX06断面（西から）

1～10はピットSX06-01から出土した瀬戸・美濃焼の縁釉丸皿である。10枚重なって出土した。皿は同規格で径11.0cm、器高2.5cmである。火床を切り込む炭の円形輪郭SX06-02から陶器片、土師器片とともに完形の備前焼小壺11が出土した。壺は器高8.0cm、中に金属銷が溜まる。一部は錢や釘などと考えられるが詳細は不明である。鉄漿壺の可能性を考えている。この他に錠前や燐止金具、棒状の鉄製品の集塊などの金属製品の出土が目立つ。SX06-05からは備前焼壺12や漆碗が出土した。備前焼壺11・12、瀬戸・美濃焼の丸皿は16世紀中頃から後半のものと考えられる。火床の下の堆積層からほとんど遺物は出土しておらず、カマドの構築時期は明確でないが、16世紀代のものと考えられる。



第8図 SX06出土遺物 (Scale 1 : 4) 1～10 : SX06-01 11 : SX06-02 12 : SX06-05



写真9 SX06-01皿と鉄製品出土状況（西から）



写真10 SX06-02備前焼小壺出土状況（西から）

調査区北東部に堆積する黄灰色粘質土は整地層と考えられ、面上で黄白色の粘土帶の区画を検出した。調査区南辺の中央付近に集石遺構SX03があり、この遺構の周囲にも粘質土が堆積する。調査区西端のSD01の周囲でも粘質土を検出しが、SD01出土遺物からは異なる整地層の可能性が高く、I区南側には近世の土坑が続いている。調査区東半の整地層面にはカマドSX06や集石遺構SX03が構築されたと考えられ、SK14・15など灰色砂面で輪郭が見える土坑も整地面に伴う遺構の可能性がある。これらは出土遺物より16世紀～17世紀前半の遺構と考えられ

る。調査区東端の帶状粘土SX07からの遺物の出土はほとんどなかったが、これも検出状況からは同時期のものと思われる。

西国街道の痕跡である調査地東側の現道に近い部分で17世紀～18世紀代のSE07・08などの井戸を検出している。西国街道に面する建物を想定した場合、井戸のある場所が敷地の裏に位置するのでは土地利用において有効性に欠ける。町境における建物配置の状況などは明らかでないが、街道に面した建物の（ミセ）土間の一部に相当する可能性も考えられる。



1



4

7



1~10

SX06-01出土 濑戸・美濃焼緑釉丸皿



11



12

SX06-05出土 備前焼壺



SX06-02出土 備前焼小壺（下の写真は内部の金属錫）

写真11 SX06出土遺物

(2) 第2遺構面検出の遺構と遺物

T.P.0.0m前後の灰白色砂面で建物礎石列、土坑、溝、集石遺構、ピットなどの多くの遺構を検出した。これらの遺構は調査区の東西両端に集中し、東側でとくに密度が高い。調査地の中央部分は遺構が希薄でやや軟弱な地盤であった。調査区西半、中央、東半のそれぞれの範囲の状況について記す。

調査区西半（I区）

南側で土坑や溝、落ち込みを検出し、北側ではピットや土坑、礎石状の石を検出した。

西端、第1遺構面で検出したSD01の下層には暗灰色細砂が堆積し、幅2.0m、深さ0.2mで東約5.0mの範囲までは上層と同様、溝状に落ち込む。埋土は上層のSD01には暗灰褐色粘質土が堆積しており、下層の砂とは明らかに異なる。同位置に形成されていた先行する溝の可能性があるが、元々あった崖みに遺物包含層である灰色砂が堆積したものとも考えられる。さらに東側、II-2区の中央南側の範囲も軟弱な地盤で浅い落ち込み状を呈し、この部分までは崖地が続いているものと考えられる。

SD01下層の西端でSK10～13の土坑を検出した。また明確な遺構に伴わないが灰白色砂面で完形の瓦器塊が出土した。SD01下層の遺物の出土状況からは浜堤面検出の一部の遺構は12世紀後半から13世紀代のもの可能性がある。落ち込みに沿って北側でSK07、南側ではSK08の平面長方形の土坑を検出した。この状況は上層の溝SD01にSK03、II-1区の溝SD02の南北に土坑SK14・15が接する状況と共通する。

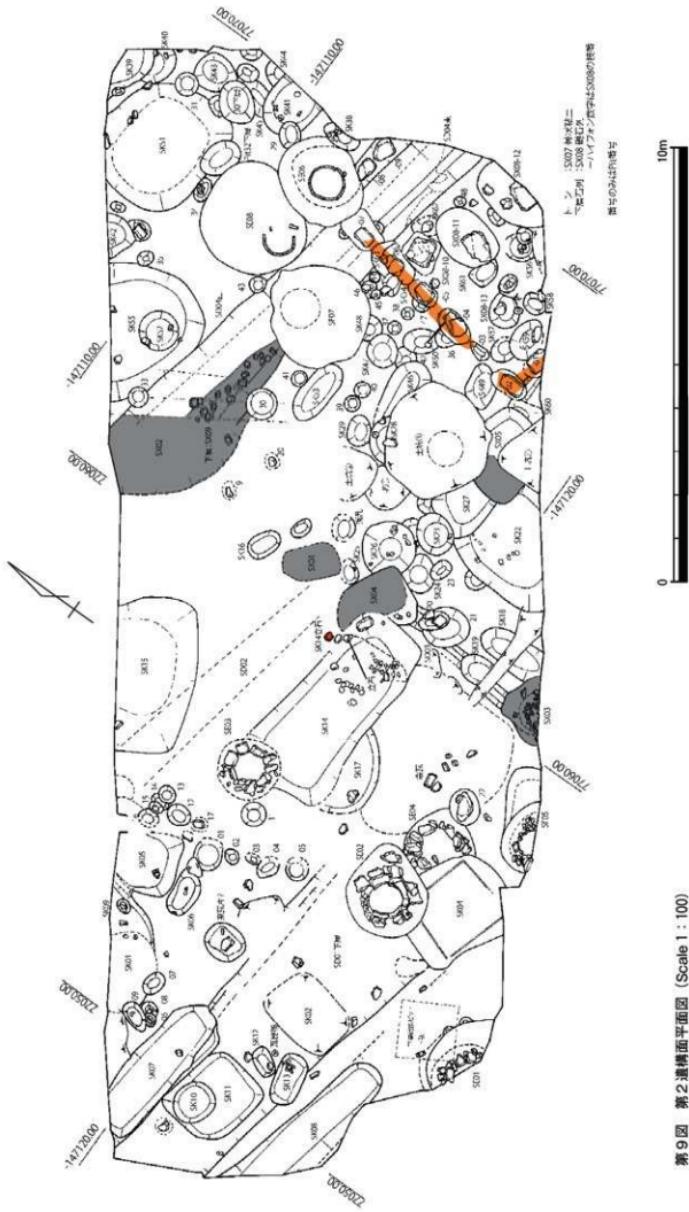
SD01下層の北側で土坑5基とピット10基を検出した。土坑SK05からは細片であったが土師器皿が出土し、復元の結果10枚以上含まれていたことが判明した。SK05は一辺2.0mほどの方形の土坑で、土師器皿の出土した部分は平面円形で深さ0.2mほどさらに深くなっていた。土師器皿には口径12cm前後のものと8cmのものの2種ある。

周辺で検出したピットは径0.2～0.4m、深さ0.2m前後のものである。Pit06や09からは丸瓦15・16が出土しており、Pit10からは鬼瓦の一部と考えられる瓦が出土したが、これは部位の確定ができない。礎石状の石も点在しており、SE01付近から東では遺構が希薄となる。ここを東端として柱穴や礎石で構成される建物、柵列などがあったと想定される。

SK14の南側の地盤は軟弱で、SD01下層から続く落ち込み状の地形は何らかの遺構埋土の可能性があるが、湧水により不明である。ここから鳥糞瓦が出土した。量は少ないが、調査区西半を中心に調査区の東半の遺構からも中世の瓦が出土している。今回の調査地の西側の調査地でも中世の瓦が出土している。付近に瓦を使用した建物の存在する可能性が高い。



写真12 I区第2遺構面全景（西から）



第9図 第2邊構面平面図 (Scale 1 : 100)



写真13 SK05全景（南西から）



写真14 Pit06~10全景（南東から）



写真15 Pit10鬼瓦？片出土状況（南東から）



写真16 SD01下層瓦器塊出土状況（東から）



写真17 II-2区鳥衾瓦出土状況（北から）



写真18 Pit22棟出土状況（断面）（東から）



写真19 SD01下層出土瓦器塊



写真20 Pit22出土瓦質土器鍋

II-2区の浅い落ち込みから出土した瓦で、鳥食瓦と思われる。前面には粘土が充填されている。側面長は29cmである。

また周辺の灰色砂から波状文軒平瓦、「妙」字軒丸瓦、鬼瓦角部、瓦質土器などが出土している（写真23）。

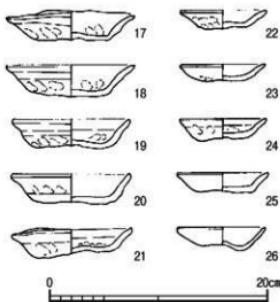
写真21 II-2区灰白色砂面出土鳥食瓦



写真22 Pit6~10出土瓦



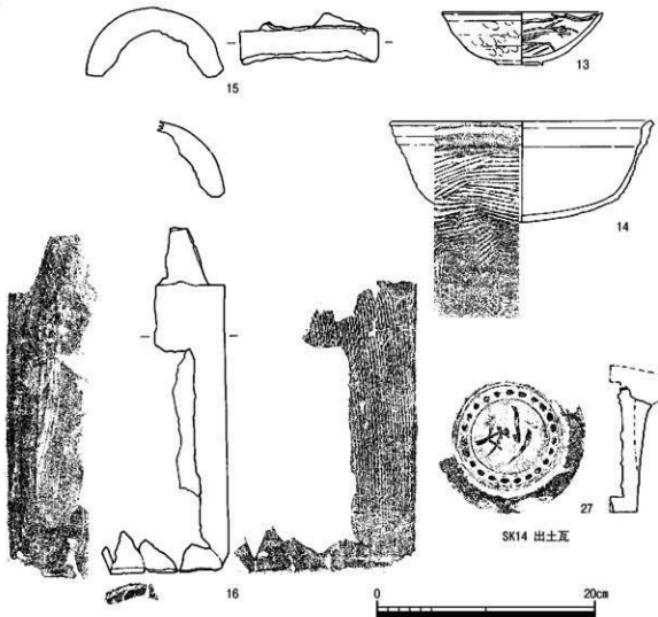
写真23 灰色砂出土瓦・瓦質土器



第10図 SK05出土土器皿 (Scale 1:4)



写真24 SK05出土土器皿



第11図 I・II区出土遺物 (Scale 1:4)

調査区中央 (II-1・2区)

東西の井戸列に挟まれた範囲である調査区の中央部分は窪地を形成し、地盤が軟弱で湧水も顕著である。土坑状の落ち込みであるSK14やSK15は上層から輪郭が見えた造構で、下層の浜堤面ではSK14は東西4.5m、南北2.0m、下層部分の平面形は長方形を呈し、深さは0.2mほどが明確な落ち込みを形成する。SK14からは土師器皿、須恵器鉢・甕、瓦質土器、天目碗、唐津焼皿、備前焼壺・播鉢、丹波焼播鉢、「妙」字軒丸瓦などが出土したが、出土遺物の年代には幅がある。上層の落ち込み部分と下層の土坑とは異なる造構の可能性があるが明らかでない。

北側のSK15は調査区内では東西5.0m、南北も5.0m以上の規模があり、北側にさらに落ち込む様子が窺える。陶器、瓦片などが出土したが量はさほど多くなかった。詳細が分かる遺物も少なく、造構の性格や時期についても不明な部分が多い。SK15の東側にはSX02とした集石造構がある。灰色砂質土と黄色粘土が堆積し、拳大から人頭大の石が混じる。上方の石の間からの遺物の出土は少ないので、石の下からは土師器皿をはじめ、須恵器、陶器（備前焼、丹波焼、瀬戸・美濃焼）、瓦質土器、瓦などが出土、瓦には鬼瓦の角の破片なども含まれる。SX02もSK15と同様、北側に落ち込む様子が窺える。出土遺物はやや古相を示すものである。

SK14の北東隅で立石を検出した。調査地東側、元禄絵図に描かれる宮前町大道から続く東西道路の延長線上、町境と後述する集石遺構が南北に並ぶラインが交わる位置と想定される。

調査区東側では多数の遺構を検出しており、集石遺構付近から西側では検出遺構が減少する。遺構の多寡、窪地地形へと変化する位置で、立石は何らかの境界を表すものと推測される。石は20cm角、高さ45cmの花崗岩製で、第2遺構面を形成する灰白色砂に15cmほど埋まっていた。本来は第1遺構面の灰色砂面に頂部が出ていた可能性がある。



写真25 SK14出土遺物



写真26 II-2区遺構検出状況（東から）



写真27 SX02検出状況（北西から）



写真28 SX02出土遺物

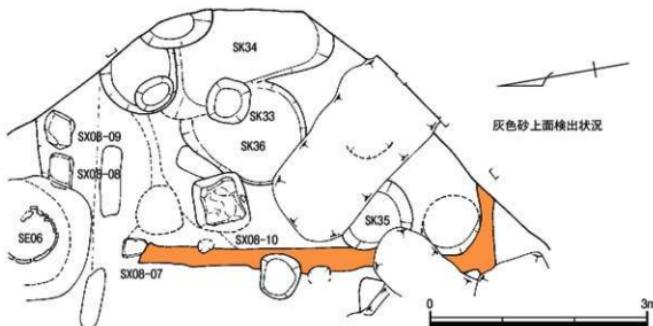
調査区東半（Ⅲ区）

建物に伴う帶状粘土と礎石列、そのほか土坑、集石遺構、ピット、溝を検出した。

帶状粘土SX07

調査区南東部、灰色砂面で黄白色を呈する帶状の粘土の堆積を検出した。下位には礎石列SX08がある。粘土の幅は20cm、厚さ10cmである。調査区内でL字状に検出した。下位の礎石列の西辺と南辺にあたり、検出長は西辺の部分が南北約5.0m、南辺は約1.0mである。西辺SX08-07の北側と北辺のSX08-08・09の石の上面では粘土は確認していない。

SX07に囲まれた内側で一辺60cmの大型の礎石と考えられる石SX08-10を検出した。SK33・35などは規模や配置からSX08-10礎石と同様の礎石があった抜き取り痕の可能性がある。またSK34・36の底にはそれぞれSX08-11・12の大型の礎石がある。これらの土坑は掘形か抜き取り痕と考えられる。SX08-10やSK35と切り合う部分の断面観察ではSX07の帶状粘土は下位が幅広になっており、本来はもう少し幅があったようだが、抜き取り痕などの土坑により削られた状況が考えられる。



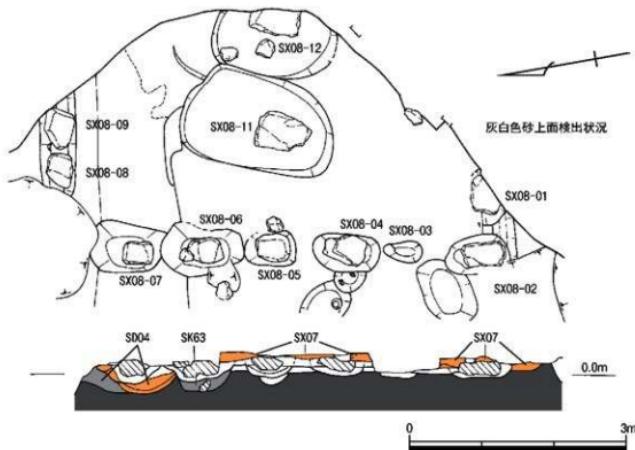
第12図 SX07平・断面図 (Scale 1 : 60)



写真29 SX07検出状況（南から）

礎石列SX08（礎石建物）

帯状粘土SX07の下位に位置する礎石列で、石を8石検出した。SX08-03とした部分は抜き取られたか、後世の搅乱を受けている。礎石は長辺40~60cm、短辺30cm、厚さ20cmほどの花崗岩を用いる。建物西辺と北辺、南辺の一部を検出し、北西角の石はSE06により失われている。西辺は本来7石あり、南北6間の建物と考えられる。東西については北辺で2石、南辺で1石を検出し、東に続くものである。西辺、南辺の礎石間は0.4~0.5mの間隔が空くが、北辺SX08-08・09の礎石の間には隙間がほとんどない。建物南北の中軸上に大型の礎石SX08-11・12が東西に並ぶ。石は長辺80cm、厚さ40cmほどを測る大型のものである。



第13図 SX08平・断面図 (Scale 1 : 60)



写真30 SX08礎石列全景（西から）

SX08-04の礎石の上では粘土が一辺0.1mほど方形に欠けていた。柱が立っていた痕跡と考えられる。また南西隅のSX08-02の上面にも粘土に窪みがあり、石の表面が露呈していた。SX08の礎石列は浜堤面では掘形を伴っているが、灰色砂面でSX07を検出した際に明確な掘形は検出できなかった。断面を観察すると灰色砂面から掘り込まれた可能性を示す箇所もあるが、明確ではなかった。



写真31 SX07北西部検出状況（南から）



写真32 SX07帯状粘土及びSX08-10断面（北西から）



写真33 SX08-04の粘土の状況（西から）



写真34 SX08-02の粘土の状況（西から）

写真32からは帯状粘土の上方が削られたか、建物内側に若干沈み込んだ状況が窺え、本来は内側に粘土がもう少し伸びるようだが、全面に及ぶものではない。粘土には小舞など壁立ちの存在を示すような痕跡を見いだせなかった。床下を閉塞する壁の痕跡なども想像したが詳細は不明であり、現状では土台と考えられる。

帯状粘土や礎石列の内側の堆積は暗褐色の粘質土で、周囲の状況から遺物包含層の灰色砂が確認されてよい高さであるが、粘質土が堆積し、石の据え付け痕や抜き取り痕と思われる落ち込みが錯綜しており、建物の内側と外側では土壤に相違が認められた。整地層の可能性もあるが、さほど堅固に突き固められた形跡はなかった。SX08-07の下層では東西溝SD04を検出しており、粘質土や粘土が堆積する。溝の壁に張り付くように粘土が堆積しており、自然堆積とは考えにくい。礎石はこの溝を埋め戻し、簡単な地均しの後据えられたと考えられる。SX07・08内側の堆積層からの出土遺物は少ないが、須恵器鉢や土師器壺、瀬戸・美濃焼天目壺、甕や火入れ、小型の菊文軒丸瓦や平瓦、瓦質土器が出土し、SX08-06の下層、掘形の可能性のあるSK63から駆斗瓦か平瓦、瓦質土器火鉢などが出土した。整地のためか、出土遺物にはやや時期

幅が認められる。SX08-08・09の掘形は布掘りの溝であるが、ここから飛鳥時代の須恵器坏身1点が出土した。摩耗しておらず、近隣での同時期の遺構の存在を示す興味深い遺物である。

また後述するSX02やSD01と同じく、精良な粘土で作られた小型の土師器皿が少量出土している。祭祀、地鎮に伴う可能性がある。SD04では粘土に張り付くようにして小皿が出土した。SD04の埋土の粘土とSX07に使用された粘土、SX07の内側に部分的に堆積する粘質土は土質が似ており、一連の整地や地業の痕跡の可能性がある。



写真35 SD04+SX08断面（西から）近景



写真36 SX08-11断面（西から）

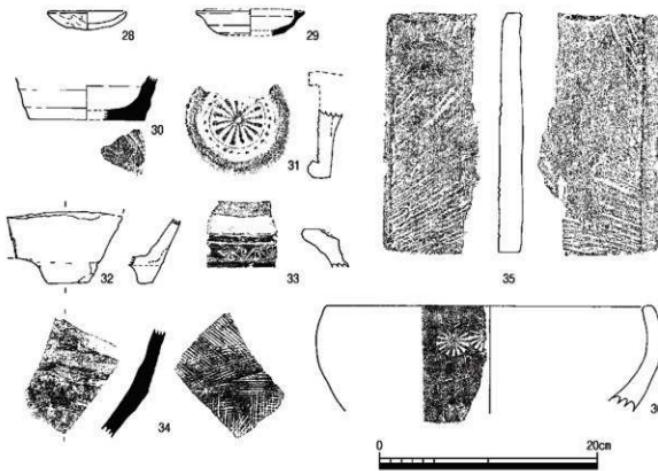
灰色砂面で礎石列SX08の掘形が明確でなかったことから、SX08の礎石を据えて整地を行い、粘土を敷いて土台としたもので、石の上の粘土に柱痕跡があったことから貫状態で結合された可能性が考えられる。SX08のみで構成される前身建物が存在した可能性もあるが明確でない。周辺での調査例からSX08は土台とするのが妥当と考えるが、現状でSX08-11・12の巨大な石が中央に2石配される点は特異である。大型の建物であり、構造については不明な点が多い。



写真37 SX08内側堆積層及び掘形出土遺物



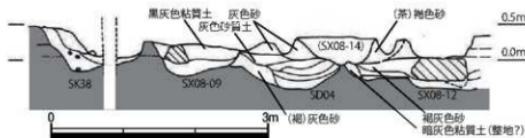
写真38 SK63出土遺物（SX08-06掘形）



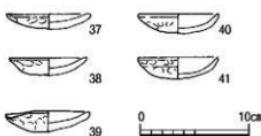
第14図 SX08出土遺物 (Scale 1 : 4)

溝

III区北側で東西方向の溝SD04を検出した。幅2.0m、深さ0.5m、調査区内での検出長は約10.0mで西側は集石遺構SX02へ、東側は調査区外に続く。溝の肩部に黄色粘土が堆積、最終埋土は灰色砂である。SE07と切り合う西半では埋土上面に整地層と考えられる黄灰色粘質土が堆積し、SX09とした拳大の石が並ぶ箇所がある。東半のSE07以東には同様の堆積はない。埋土の黄色粘土に張り付いて精良な粘土で作られた土師器の小皿がまとまって出土した。地鎮に伴う可能性などが考えられる。



第15図 III区東壁土層圖 (Scale 1 : 60)



第16図 SD04出土遺物 (Scale 1 : 4)



第17図 SD04 (西) 断面図 (Scale 1 : 60)



写真39 SD04出土遺物



写真40 SD04（東）断面（西から）

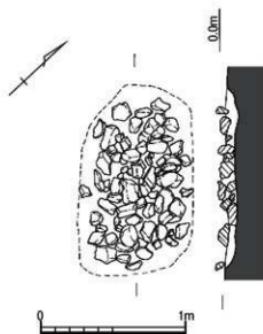


写真41 SD04（西）断面（東から）

集石遺構

調査区東半中央寄りで4基の集石遺構を検出した。

SX01は長辺1.2m、短辺0.7m、灰白色砂面検出時の深さは0.1mで、石のレベルを考えると本来はもう少し深さが残っていたと思われるが、灰色砂との境は明瞭でなかった。拳大の石を中心に入頭大の石を含む。石の底から土師器皿小片が出土したのみで土器の出土は少ない。大型の砥石が1点出土した。集石への転用と考えられる。

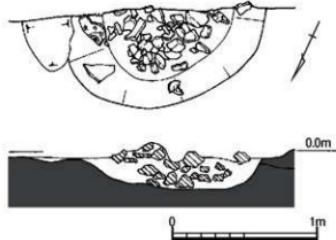


第18図 SX01平・断面図 (Scale 1:30)



写真42 SX01全景（北から）

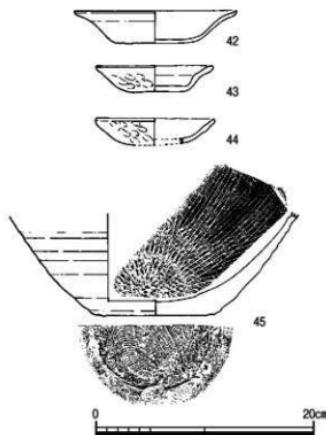
SX03は径1.2mほどの平面円形の土坑と考えられるが、調査区南側に続く。灰色砂上面で石が見えはじめた。土師器皿、唐津焼擂鉢、陶器甕、瓦質土器火鉢などが出土した。土師器皿は口径15cmのものと11cmのもの2種ある。陶器甕口縁は火を受けて器壁が脆く、石にも被熱痕が認められる。



第19図 SX03平面・断面図 (Scale 1 : 30)



写真43 SX03検出状況（北から）



第20図 SX03出土遺物 (Scale 1 : 4)

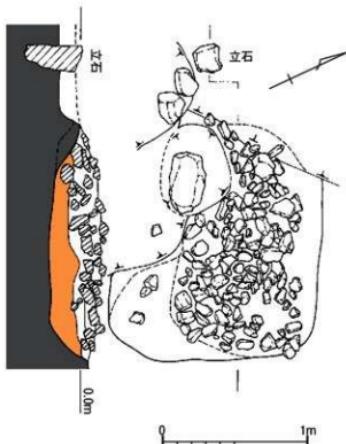


写真44 SX03出土遺物

SX04は長辺1.5m、短辺1.4m、ほぼ方形の土坑である。深さは0.4mである。当初は径0.3mの円形の粘土の堆積を検出し、西側を大型の礎石状の石を伴うPit14や土坑SK14に削られる状況であった。この粘土が下層に続き、粘土の上に石が堆積する。集石部分と粘土の堆積はともに厚さ0.2mである。集石部分より土師器皿や平瓦などが出土した。石には被熱痕が認められるものが多く、土師器皿も被熱により器壁は脆く、瓦も赤化している。

SX05は一辺約2.0mの平面隅丸方形の土坑である。集石は土坑の南西隅にあり、拳大から人頭大の石である。集石の範囲は南北1.2m、東西0.7m、深さ0.2mの規模である。SX04と同様、粘土が集石の周囲に張られており、東半は粘土のみが堆積している。粘土が堆積する土坑の最終埋土として石が集積された状況とも考えられる。

石が集積された状況は、調査区北東部で検出した東西溝SD04の西端でも確認しており、これをSX02とした。土坑状ではなく、北側への下がり地形であるが、ここにも人頭大の石が多く溜まっていた。窪地、溝とともに疊や粘土で埋め戻した後に上面を整地したと考えられる。



第21図 SX04平・断面図 (Scale 1 : 30)



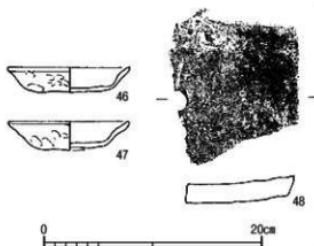
写真45 SX04検出状況（東から）



写真46 SX04断面と立石（西から）



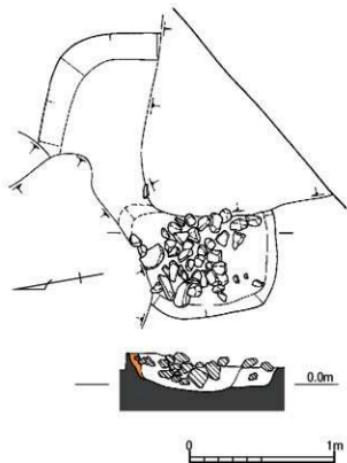
写真47 SX04出土遺物



第22図 SX04出土遺物 (Scale 1 : 4)

SX04とSX05は同規模で東西に4.5mの間隔で並ぶ。土坑の壁や底に粘土が張られる構造的な共通点が認められる。SX04からの遺物の出土は少なかったが、SX05からは瀬戸・美濃焼卸皿や鉢、土師器鉢、瓦質土器鍋、青磁碗などが出土した。粘土層から遺物は出土せず、集石部分からの出土である。粘土が堆積する部分の方が規模は大きい。

北側SX02から南へ、SX01、SX04、SX03と集石構造が南北に並び、これを境に西側で遺構が希薄となる。出土遺物から集石構造は同時期のものではないが、SKI4、SX04の北西で検出した標石状の石とともに境となり、これより西は軟弱な地盤で遺構が希薄となる。



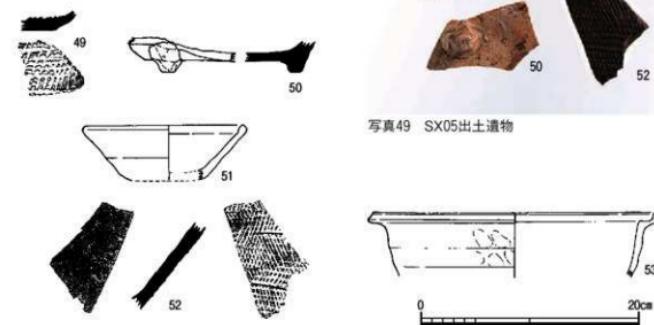
第23図 SX05平・断面図 (Scale 1 : 30)



写真48 SX05検出状況（北西から）



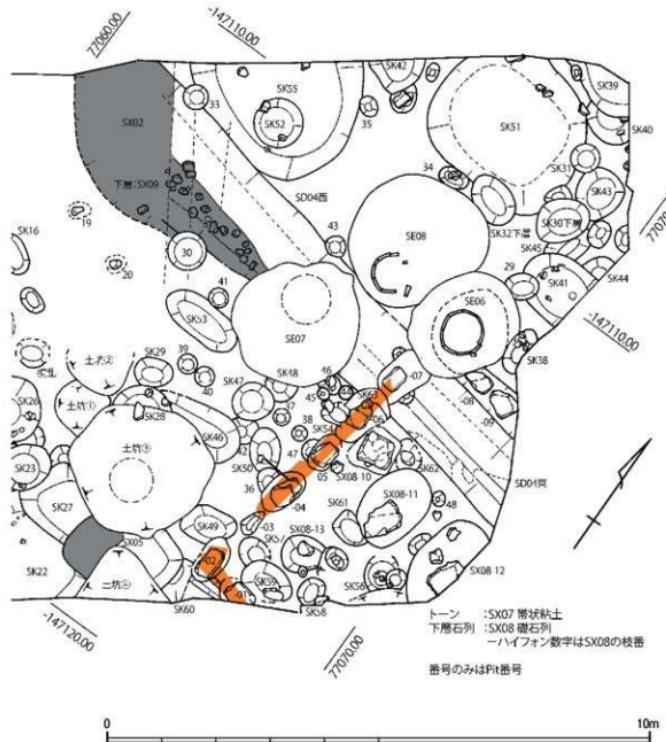
写真49 SX05出土遺物



第24図 SX05出土遺物 (Scale 1 : 4)

土坑及びピット

今回の調査では第1・2遺構面合わせて土坑60基、ピット40基以上を検出している。その多くが調査区東半、第2遺構面での検出である。平面形は円形、または椭円形で、規模は径0.5~2.0mで、径1.0m前後のものが多い。SK22・51・55は径3.0m前後の大型の土坑で、SK22・51の検出位置は上層遺構面検出の井戸と同じ方向に並んでいる。素掘り井戸の可能性も考えられるが、湧水のため底の様子は明らかでない。土坑SK19・32・38・39・40・41・49・50など径1.0m前後の土坑からは完形の土師器皿が出土した。皿は口径11.0~12.0cmのものを中心に、口径16.0cmほどのやや大型のもの、口径7.0cmの小型のものが出土した。15世紀後半の遺構を中心に16世紀~17世紀代の遺構も含まれるものと考えられる。土師器皿のほかには陶器、瓦、瓦質土器、銅錢などが出土した。



第25図 III区第2遺構面平面図 (Scale 1:80)

土坑、ピットとも埋土はほとんどが暗灰色砂の單一層である。土坑に比べ形状、規模ともに小規模のもので平面形が正円に近いものをピットとしている。径0.2~0.3mのものがほとんどであるが径0.5mのものも掘形の形状からピットとしたものがある。深さは0.2mまでは確認できるが、湧水の影響で下層の様子は明確でない。土坑からは完形の土師器皿などが出土するが、ピットからは完形の遺物の出土は少ない。破片を復元して完形になるものはある。

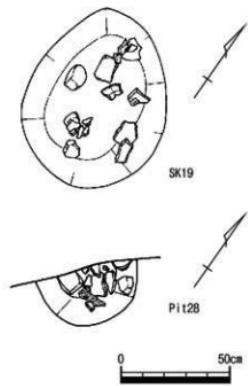
また浜堤面上で一辺20cm前後の平石を検出した。掘形は明確でなく、礎石か礎かいずれの形態かは明らかでない。石の配置を基に建物の復元を試みたが、今回の調査範囲では建物などは明確にならなかった。また上層造構カマドSX06の際でPit28を検出した。SX06と同様、被熱痕が認められ、炭化物が混じる。土師器皿、鉄製品、銅錢、獸骨などが出土した。カマドに関連する造構の可能性が考えられる。



写真50 SK19断面（南から）



写真51 SK19全景（南から）



第26図 SK19・Pit28平面図 (Scale 1 : 20)



写真52 SK19出土遺物



写真53 Pit28遺物出土状況（南から）



写真54 Pit28出土遺物



写真55 SK32検出状況（東から）



写真56 SK38遺物出土状況（西から）



写真57 SK39全景・SK40検出状況（南から）



写真58 SK41全景（西から）



写真59 SK50断面と遺物出土状況（北西から）



写真60 SK55検出状況（南から）

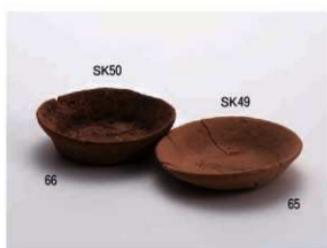
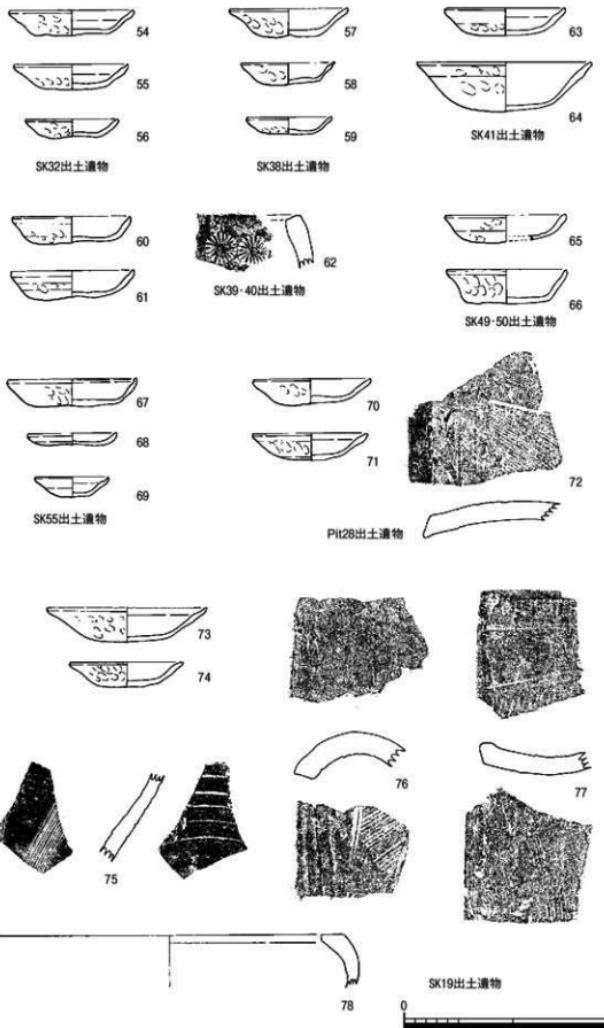


写真61 土坑出土遺物



第27図 土坑出土遺物 (Scale 1 : 4)

(3) その他の出土遺物

① 遺物包含層・浜堤面・盛土層出土遺物

土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器や青磁、白磁、備前焼、丹波焼、瀬戸・美濃焼が遺物包含層である灰色砂や第2遺構面を形成する浜堤面、灰白色砂上の浅い溝みに薄く堆積する土壤化層から出土している。13世紀～15世紀代のものが含まれる。SK10の傍から出土した瓦器塊は12世紀後半のものであろう。完形であるが遺構には伴っていない。

第1遺構面上層の整地層、また盛土層の出土遺物は17世紀代のものが中心と考えられる。

② 石製品

滑石製品が出土している。石鍋（片）は形態から12世紀～13世紀代のものと考えられ、再利用への過程のものと考えられる。このほかに錘、ヘラ状工具と思われるもの、用途は不明であるが板状で菱形に加工されたものなどが第2遺構面の土坑やPitから出土している。

このほか集石遺構SX01では集石に混じり大型の砥石が出土した。集石へ転用されたものと思われる。第2遺構面の大型の土坑や遺物包含層からは片岩の出土が目立つ。

井戸SE03では前述のように石塔、笠石が転用されていた。

③ 土製品

1. 漁撈具（土錘）

出土した土錘はいずれも管状土錘である。胴部中央が膨らむ。長さは小型のものが4cm前後、その他は6cm前後である。寸胴型で横幅が長さの1/2以上ある小型のものがわずかに出土している。大型で硬質の土錘は上層整地層からの出土で、近世初頭のものと思われる。遺物包含層からの出土が多く、遺構に伴うものは少なかった。

2. 土製円板

土器（土師器・須恵器・瓦器）、陶器、瓦片などを加工している。径は小さいものは2cm、大きなものが5cmほどある。第2遺構面の浜堤面で検出したSK55など大型の土坑からの出土も顕著であった。



写真62 滑石製品



写真63 石製品と石材

土製円板を3グループで比較する。
灰色砂（遺物包含層）、中世の遺物出土のものは土師器・須恵器・瓦器を加工し、小型のものが多い。大型の土坑出土のものには甕の破片が目立つ。整地層・盛土層から出土のものは陶器片が主体でやや大型である。



写真64
土製品（土錘・円板）・羽口片

灰色砂（遺物包含層）からは須恵器、土師器、瓦器のほか、備前焼捲鉢や蓋戸・美濃焼などが出土する。13世紀～15世紀代の遺物を含む。



写真65
灰色砂出土遺物

大型の土坑の底面からは12世紀後半から13世紀にかけての須恵器、土師器、瓦器、青磁・白磁が出土する。また浜堤堆積面には土壤化した砂が堆積する浅い落ち込み状の部分があり、明確な遺構とはならないが、この砂の中からも破片ながら中世の遺物が多く出土する。

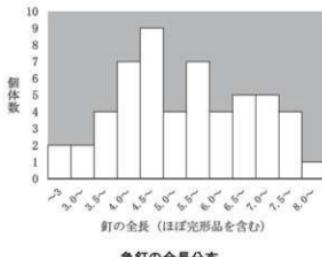


写真66
SK55下層出土遺物

④金属製品

今回の調査では198点の金属製品が出土した。器種が明確なものとして釘、鎌、小札、目貫、煽止、錠前、錢貨などがある。このうち、全形を窺い得る84点を実測図または写真に示した。

釘類：合計147点が出土しており、金属製品の大半を占める。角釘は全長1～3寸前後におさまるものがほとんどで、4cm台の個体が最も多い。頭部の整形方法は、①棒状素材の端部を折り曲げたもの（M1～4・8・16）、②叩き延ばした端部を折り曲げたもの（M9～15）、③叩き延ばした端部を手前に巻き込んで頭部としたものの（M19～37）の大きく3種がある。M1・2は典型的な皆折釘で、構造材の結合にも耐え得る肉厚なものである。M3・4は胴部の断面形が長方形を呈す。M8～16は法量のうえでは巻頭釘（M19～36）とほぼ同じだが、頭部の整形において、端部を巻き込まずに折り曲げる点と、頭部が横方向（釘の正面主軸に直行する方向）に突出せず、胴部とほぼ同じ幅を維持する点に特徴がある。M19～36は典型的な巻頭釘である。これらは、頭部幅が胴部幅の2倍程度となるものがほとんどだが、M27・28のように頭部を横方向にはほとんど突出させないものもある。こうした角釘の頭部形態のバリエーションは、使用対象の違いや意匠性の強弱を反映したものと考えられる。このほか、頭部を作り出さない切釘（M17・18・39）などがある。

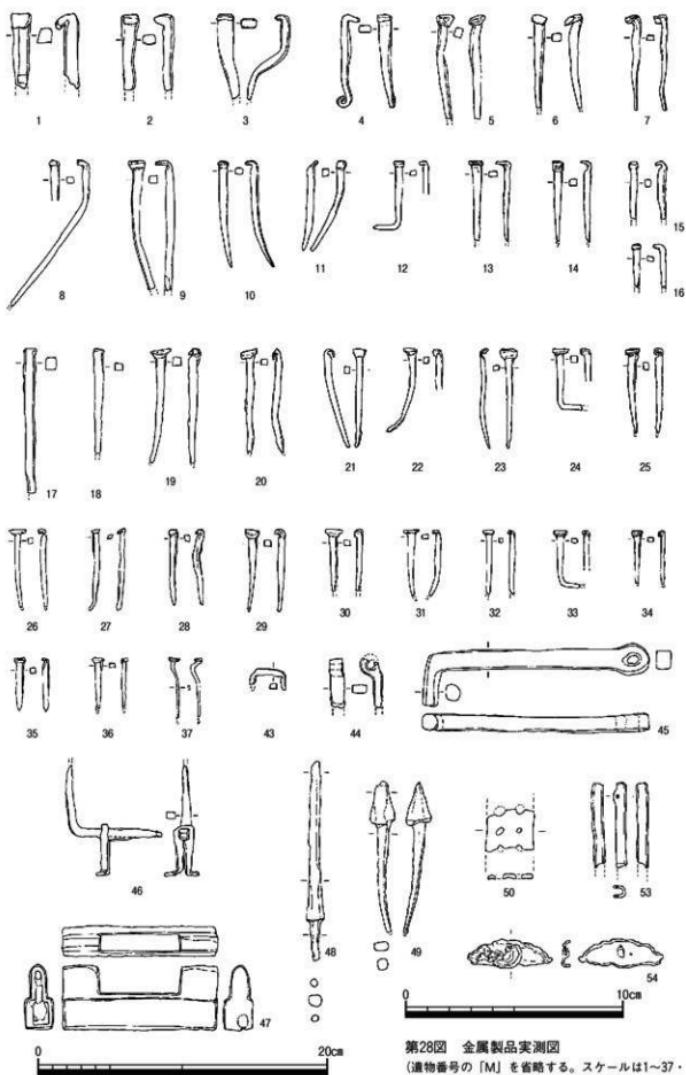


角釘の全長分布

金具類：M43・46は結合具の一種とみられる。M44は壺金で、小型の煽止や鎌などに接続するものであろう。M45は煽止で、全長15.69cmを測る。胴部の断面形は方形だが、L字形に屈曲した掛金部の断面は丸みを帯びる。重厚感があり、使用対象の大きさを窺わせる。M47は錠前で、海老鎧の化金具である。円形の鍵穴にわずかに鎌の痕跡を残す。長軸10.73cm、短軸4.52cmを測る完形品。M51・52は棒状の鉄製品が一体となった集塊で、鉄釘などの素材であろうか。煽止（M45）や錠前（M47）と共にSX06-01の小ピットから出土した。M53は銅製の金具で、調度品などの縁物とと考えられる。

武器・武具類：鎌2点（M48・49）、小札1点（M50）、目貫1点（M54）がある。鎌はいずれも尖根鎌で、鎌身部の長いM48と短いM49がある。中世後半頃から盛行する形式である。小札（M50）は破片資料のため全形は窺えない。孔は2列、札幅は2.21cmを測る。目貫は銅製で、意匠は植物図とみられる。

錢貨：35枚が出土しており、すべて銅錢である。錢種を推定し得る30枚を写真69に示した（M55～84）。このうち渡来錢が15種28枚（開元通寶・淳化元寶・至道元寶・景德元寶・天聖元寶・皇宋通寶・嘉祐通寶・治平元寶・元豐通寶・元祐通寶・紹聖元寶・元符通寶・政和通寶・紹熙元寶・永樂通寶）と大半を占める。遺構別にみると、SK51から16枚、SK32から3枚がまとまって出土している。錢種別にみると、天聖元寶が5枚、元豐通寶が4枚、紹聖元寶が3枚ある。寛永通宝は古寛永が2枚出土したのみである。



第28図 金属製品実測図
(遺物番号の「M」を省略する。スケールは1~37・
43~47が1:3、48~50・53・54が1:2である。)

表1 金属製品観察表(1)

番号	遺物名	材質	法量(cm)			欠損状態	出土層位	備考	台帳 番号	
			長	幅	厚					
M1	角釘	鉄	折	[5.13]	1.11	1.02	胸部下半欠	I区 灰色砂	036-3	
M2	角釘	鉄	折	[5.20]	0.92	0.58	胸部下半欠	I区 灰色砂	厚さは推定 036-4	
M3	角釘	鉄	折	(7.15)	1.12	0.67	先端部欠	III区 pit31	断面長方形 201-1	
M4	角釘	鉄	折	7.47	0.84	0.52	完形	III区 灰色細砂	断面長方形 212-1	
M5	角釘	鉄	不明	(7.19)	0.53	0.66	先端部欠	I区 灰色砂(第1面)	036-1	
M6	角釘	鉄	不明	(6.52)	0.63	0.56	先端部欠	I区-1区 灰色砂	040-1	
M7	角釘	鉄	不明	6.59	0.50	0.39	完形	I区-1区 SX02石下層	059	
M8	角釘	鉄	折	(11.66)	0.53	0.45	先端部欠	I区 滝中央(井口)	002	
M9	角釘	鉄	折	[9.09]	0.58	0.52	先端部欠	III区 带状粘土内側灰色砂	126-2	
M10	角釘	鉄	折	7.58	0.57	0.54	完形	I区 SK06	016-1	
M11	角釘	鉄	折	[6.65]	0.48	0.51	先端部欠	II-2区 凝灰岩色	071	
M12	角釘	鉄	折	(6.11)	0.47	0.50	先端部欠	I区 灰色砂~灰白色砂	037-3	
M13	角釘	鉄	折	(5.56)	0.61	0.39	先端部欠	I区 灰色砂~灰白色砂	037-4	
M14	角釘	鉄	折	(5.60)	0.51	0.47	先端部欠	III区 pit35	211	
M15	角釘	鉄	折	[3.97]	0.46	0.51	先端部欠	I区 灰色砂~灰白色砂	037-1-1	
M16	角釘	鉄	折	(3.01)	0.43	0.34	先端部欠	I区 灰色砂~灰白色砂	037-9	
M17	切釘	鉄	-	[9.97]	0.74	0.89	先端部欠	II-1区 灰色砂	058	
M18	切釘	鉄	-	(7.23)	0.61	0.50	先端部欠	II-2区 pit22	073	
M19	角釘	鉄	巻	(7.91)	0.64	0.61	先端部欠	III区 灰色細砂	212-2	
M20	角釘	鉄	巻	(7.15)	0.46	0.42	先端部欠	I区 黒灰色極細砂~細砂	027	
M21	角釘	鉄	巻	6.98	0.37	0.46	完形	III区 SK51	228-1	
M22	角釘	鉄	巻	6.80	0.44	0.49	完形	I区 灰色砂~灰白色砂	037-2	
M23	角釘	鉄	巻	6.84	0.44	0.37	完形	III区 SX08-11	未使用か 276	
M24	角釘	鉄	巻	[5.52]	0.48	0.45	先端部欠	I区 灰色砂	036-5	
M25	角釘	鉄	巻	5.86	0.46	0.55	完形	III区 灰色細砂	212-5	
M26	角釘	鉄	巻	[5.36]	0.38	0.41	先端部欠	III区 灰色細砂	212-4	
M27	角釘	鉄	巻	5.58	0.40	0.30	完形	I区 灰色砂~灰白色砂	037-1-1-2	
M28	角釘	鉄	巻	5.17	0.44	0.47	完形	III区 SE06楕円形粘土質	247-1	
M29	角釘	鉄	巻	5.65	0.52	0.45	完形	I区 灰色砂~灰白色砂	037-5	
M30	角釘	鉄	巻	[4.21]	0.49	0.41	先端部欠	II-2区 灰色砂	082-3	
M31	角釘	鉄	巻	(4.65)	0.48	0.33	先端部欠	II-3区 灰色砂	109	
M32	角釘	鉄	巻	(4.42)	0.35	0.33	先端部欠	III区 SK38	194-2	
M33	角釘	鉄	巻	(4.82)	0.45	0.39	先端部欠	I区 灰色砂	036-7	
M34	角釘	鉄	巻	(3.68)	0.39	0.30	先端部欠	I区 灰色砂~灰白色砂	037-8	
M35	角釘	鉄	巻	3.60	0.42	0.43	完形	III区 SK32	135-3	
M36	角釘	鉄	巻	(3.39)	0.42	0.26	完形	I区 灰色砂	036-12	
M37	角釘	鉄	巻	不明	(4.59)	0.19	0.23	先端部欠	III区 pit57	255
M38	角釘	鉄	巻	[4.33]	0.65	0.59	胸部下半欠	II-3区 灰色砂面土坑③	頭幅広い 105	
M39	切釘	鉄	巻	7.55	0.52	0.34	完形	II-1区 灰色砂	040-2	
M40	角釘	鉄	不明	(7.86)	0.39	0.54	頭部欠	III区 SE06楕円形外側細砂	248-1	
M41	針状鉄製品	鉄	-	[16.92]	0.33	-	-	III区 帯状粘土内側	断面円形 127-1	
M42	針状鉄製品	鉄	-	[12.57]	0.37	-	-	III区 灰色砂面土坑⑤	断面円形 124-1	
-	角釘	鉄	折	5.86	0.47	0.42	完形	I区 SK06	016-3	
-	角釘	鉄	巻	(4.91)	0.37	0.35	先端部欠	I区 灰色砂	036-6	
-	角釘	鉄	折	4.44	0.36	0.33	完形	I区 灰色砂~灰白色砂	037-6	
-	角釘	鉄	不明	(4.11)	0.34	0.39	頭端部・先端部欠	II-1区 灰色砂	040-3	
-	角釘	鉄	延	(4.09)	0.26	0.29	頭端部欠	II-1区 SD02-下層	050-2	
-	角釘	鉄	巻	(6.39)	0.64	0.59	先端部欠	II-1区 SK14上層	069-1	
-	角釘	鉄	延	4.79	0.38	0.33	-	II-2区 灰色砂	082-2	
-	角釘	鉄	巻	(5.10)	0.38	0.43	先端部欠	II-1区 SK15灰色砂	042	
-	角釘	鉄	不明	(5.76)	0.39	0.41	頭端部・先端部欠	II-3区 灰色砂面土坑③	106	
-	角釘	鉄	切	6.25	0.73	0.68	完形	II-3区 SK23	111	
-	角釘	鉄	不明	(2.22)	0.21	0.20	頭端部・先端部欠	III区 SK32	135-6	
-	角釘	鉄	巻	(4.84)	0.34	0.34	先端部欠	III区 黄灰色粘土質	140	
-	角釘	鉄	巻	(3.51)	0.38	0.33	先端部欠	III区 SK38	172-2	
-	角釘	鉄	不明	(5.47)	0.36	0.31	頭端部・先端部欠	III区 SK41	195-1	
-	角釘	鉄	延	(4.79)	0.35	0.43	頭端部・先端部欠	III区 SK41	195-2	
-	角釘	鉄	折	4.42	0.36	0.36	頭端部欠	III区 pit31	201-2	
-	角釘	鉄	不明	(3.94)	0.33	0.29	頭端部・先端部欠	III区 灰色細砂	212-6	
-	角釘	鉄	不明	(4.03)	0.40	0.38	頭端部・先端部欠	III区 pit33	214	
-	角釘	鉄	巻	(4.75)	0.34	0.38	先端部欠	III区 SE08埋土	231	
-	角釘	鉄	巻	(2.67)	0.32	0.22	先端部欠	III区 pit28	239-2	
-	角釘	鉄	延	(4.75)	0.44	0.36	先端部欠	III区 SX08-4	259	
-	角釘	鉄	不明	(3.45)	0.40	0.30	頭端部・先端部欠	III区 SX08-6	261	
-	角釘	鉄	巻	6.28	0.46	0.40	頭端部・先端部欠	III区 SX08-10	263-1	
-	角釘	鉄	不明	(4.03)	0.56	0.46	頭端部・先端部欠	III区 SX08-10	263-3	

*M1~37は米国および写真のみを掲載。その他の計測値のみを掲載。その他の計測値のみを掲載。
※長さにおける()は、失却しているが全形を大きく描いていないと考えられる計測値。□は、全形を著しく描なっている計測値。

表2 金属製品観察表(2)

番号	遺物名	材質	法量(cm)			出土層位	備考	台帳番号
			長/高	幅/径	厚さ			
M43	金具	鉄	2.51	1.45	0.41	Ⅲ区 SX06-5	フメ状の留金具	168-4
M44	壺金	鉄	(3.42)	0.98	0.61	1区 灰色砂	壺止等に接続か	036-9
M45	壺止	鉄	15.69	2.26	1.21	Ⅲ区 SX06-1 小ビット		164-1-1
M46	金具	鉄	—	—	0.5~0.6	Ⅲ区 SX06-5	2本の棒状品が結合	168-1
M47	鏡前	鉄	10.73	4.52	2.02	Ⅲ区 SX06-1 小ビット	海老鋸	164-2-1
M50	小札	鉄	(1.98)	2.21	0.25	II-2区 SK14上層		069-2
M51	棒状鉄製品集塊	鉄	(11.87)	(3.79)	(1.22)	Ⅲ区 SX06-1 小ビット	鉄釘ないし鉄鍼の素材か	164-1-2
M52	棒状鉄製品集塊	鉄	(7.37)	(1.76)	(1.45)	Ⅲ区 SX06-1 小ビット	鉄釘ないし鉄鍼の素材か	164-1-3
M53	金具	銅	3.85	0.48	0.44	II-2区 灰色砂上層地層	円孔あり	065
M54	目貫	銅	3.85	1.27	0.46	Ⅲ区 pit28	松の意匠	246-7

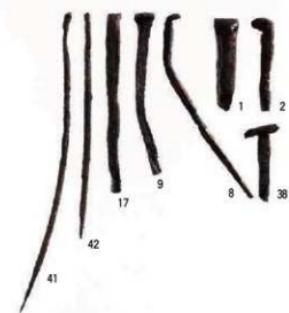
※M43~47・50・53・54は実測図および写真を掲載。M51~52は写真のみを掲載。

表3 金属製品観察表(3)

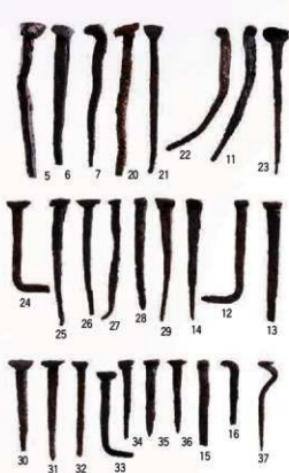
番号	遺物名	材質	形態	顕身部法量(cm)		基径(cm)	重量(g)	出土層位	備考	台帳番号	
				最大長	最大幅						
M48	鐵	鉄	尖根	7.32	0.88	ほぼ円形	0.40	6.17	II-1区 SX02	ほぼ完形	049-1
M49	鐵	鉄	尖根	1.93	1.13	円~長方形	0.53	4.77	Ⅲ区 灰色細砂	ほぼ完形	212-3

表4 錢貨観察表

番号	遺物名	錢種	細別	国・王朝 (初年)	出土層位	計測値(法量mm、質量g)					台帳番号
						外縁外径	外縁内径	内部外径	内部内径	外縁厚	
M55	銅錢	開元通寶	—	唐(621)	Ⅲ区 SK51	24.57	20.14	7.80	6.76	0.94	(223)
M56	銅錢	淳化元寶	草書	北宋(990)	Ⅲ区 SK51	24.52	18.28	7.59	5.70	1.00	334
M57	銅錢	至道元寶	真書	北宋(995)	II-3区 整地層	24.58	17.95	7.12	6.11	1.23	359
M58	銅錢	景德元寶	—	北宋(1004)	Ⅲ区 SK51	23.56	18.28	7.52	6.19	0.95	267
M59	銅錢	景德元寶	—	北宋(1004)	Ⅲ区 SK51	24.06	19.08	7.36	5.85	1.19	324
M60	銅錢	天聖元寶	真書	北宋(1023)	II-2区 SK14	24.95	21.19	8.47	7.07	1.27	330
M61	銅錢	天聖元寶	篆書	北宋(1023)	Ⅲ区 SK51	24.93	19.92	8.03	6.72	1.38	(362)
M62	銅錢	天聖元寶	篆書	北宋(1023)	Ⅲ区 SK51	24.96	20.10	8.68	6.77	1.28	343
M63	銅錢	天聖元寶	真書	北宋(1023)	Ⅲ区 SK51	24.81	20.46	7.92	6.05	1.11	(337)
M64	銅錢	天聖元寶	真書	北宋(1023)	Ⅲ区 SK51	24.74	17.93	7.17	6.09	1.07	(280)
M65	銅錢	皇宋通寶	真書	北宋(1038)	Ⅲ区 SK51	24.44	19.53	8.32	6.96	0.96	(240)
M66	銅錢	皇宋通寶	篆書	北宋(1038)	Ⅲ区 SK51	24.67	19.86	8.43	6.69	1.12	305
M67	銅錢	嘉祐通寶?	真書	北宋(1056)	Ⅲ区 SK32	23.49	18.50	7.47	6.39	1.04	311
M68	銅錢	嘉祐通寶?	真書	北宋(1056)	Ⅲ区 灰色細砂	23.99	19.72	7.84	6.61	1.34	358
M69	銅錢	治平元寶	真書	北宋(1064)	Ⅲ区 灰色細砂	23.77	17.81	6.97	5.73	1.33	286
M70	銅錢	元豐通寶?	篆書	北宋(1078)	Ⅲ区 SK32	25.43	—	9.15	7.58	1.24	(245)
M71	銅錢	元豐通寶	篆書	北宋(1078)	Ⅲ区 灰色細砂	24.78	20.71	8.31	6.53	1.18	341
M72	銅錢	元豐通寶?	篆書	北宋(1078)	Ⅲ区 SK51	23.58	17.97	7.84	6.45	1.01	(235)
M73	銅錢	元祐通寶?	篆書	北宋(1078)	Ⅲ区 SK51	25.17	20.80	8.20	6.68	1.28	403
M74	銅錢	元祐通寶	篆書	北宋(1086)	Ⅲ区 SK51	47.62	19.07	8.08	6.54	1.19	296
M75	銅錢	元祐通寶	行書	北宋(1086)	Ⅲ区 SK51	24.86	20.64	8.18	6.64	1.22	287
M76	銅錢	紹聖元寶	行書	北宋(1094)	II-3区 SX05	23.86	18.25	7.51	6.32	1.16	297
M77	銅錢	紹聖元寶	篆書	北宋(1094)	Ⅲ区 SK32	24.42	17.52	7.80	6.13	1.12	346
M78	銅錢	紹聖元寶	篆書	北宋(1094)	Ⅲ区 SK51	23.68	18.25	7.61	5.92	1.46	397
M79	銅錢	元符通寶	行書	北宋(1098)	Ⅲ区 灰色細砂	25.10	18.30	7.75	5.46	1.02	316
M80	銅錢	政和通寶	分楷	北宋(1111)	Ⅲ区 灰色細砂	24.28	21.79	7.86	6.14	1.44	(317)
M81	銅錢	熙寧通寶	背三	南宋(1190)	Ⅲ区 SK51	24.16	19.83	7.40	5.73	1.50	359
M82	銅錢	永樂通寶	—	明(1408)	Ⅲ区 黄色シルト	25.27	20.69	7.18	5.29	1.33	336
M83	銅錢	寛永通宝?	古寛永?	—	Ⅲ区 北東整地層	22.74	—	—	7.20	1.21	(153)
M84	銅錢	寛永通宝	古寛永	—	Ⅲ区 pit28	24.64	19.49	7.22	5.32	1.18	346-8



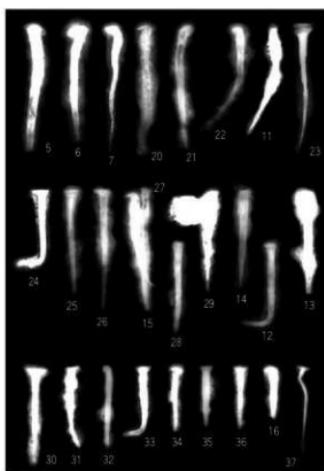
釘類(1)



釘類(2)

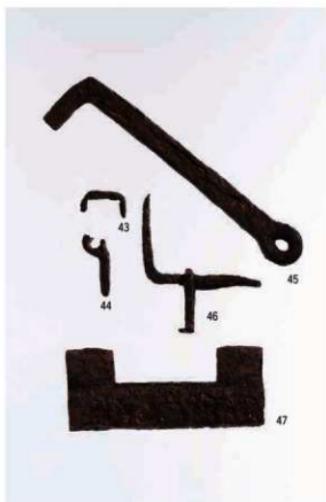


同上 X線写真



同上 X線写真

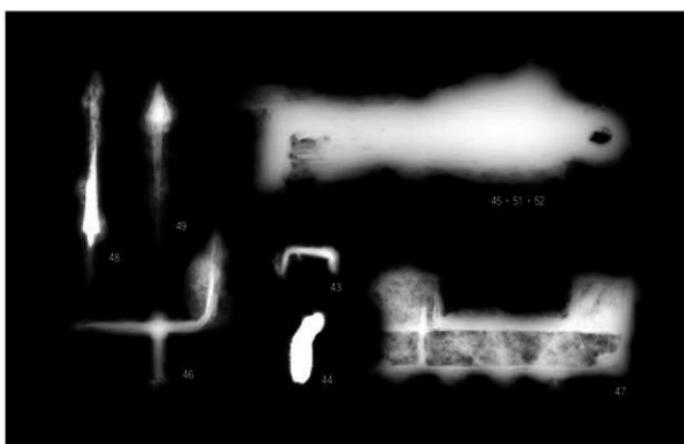
写真67 出土釘類



煙止・鉢前・金具類

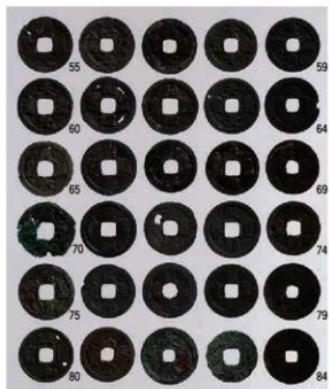


鎌・棒状鐵製品集塊

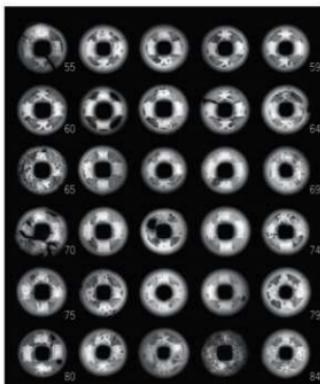


同上 X線写真

写真68 出土鐵製品



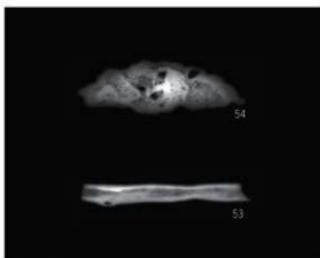
銭貨（各段遺物番号左から右へ続き番号）



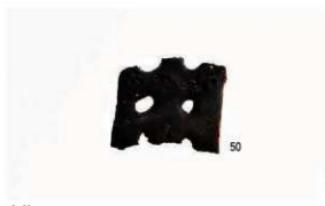
同左X線写真（各段遺物番号左から右へ続き番号）



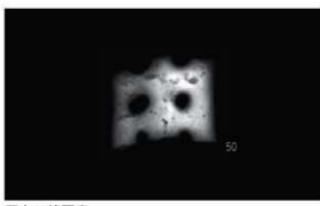
目貫・留金具



同左X線写真



小札



同左X線写真

写真69 出土銅製品

III.まとめ

今回の調査成果を概観し、本書のまとめとする。

今回の調査では遺構面2面を検出した。遺構面がいずれもT.P.0.0~0.2mの範囲にあることから湧水が著しく、遺構の検出・掘削は困難であった。遺構検出の段階での湧水の影響は大きく、遺物包含層が残らない箇所では第1・2遺構面、いずれの遺構面に属する遺構が明確でなく、ほとんどを第2遺構面検出の遺構として扱わざるを得なかった。

検出遺構のほとんどは兵庫津を描く現存最古の絵図である元禄絵図が描かれる以前のものである。現況GL.-2.0mの部分がほとんど失われていたが、盛土下、第1遺構面の一部に整地層と考えられる堆積が認められた。東半では整地の様子が一部確認され、礎石建物やカマドを検出している。カマドを切り込む遺構から錠前や煽止などの金属製品が出土しており、大型の建物に用いたものと考えられる。検出した礎石建物が倉庫であった可能性を示すものであり、これらは16世紀~17世紀前半の遺構と考えられる。

浜堤面である第2遺構面での検出遺構は土坑やピット、集石遺構、溝で15世紀後半を中心とする時期のものである。灰色砂上面でも一部、中世の遺構と考えられるピットや土坑の輪郭が見えたが、明確に形状を把握することが難しく、下層の浜堤面の同じ位置で上面からの掘り残しの状態で検出した遺構も多かった。第1遺構面、第2遺構面、いずれの遺構面も遺構の輪郭や底の状況は不明瞭であった。検出遺構は第1・2遺構面ともに調査区中央で遺構が希薄であり、東側と西側、両端に遺構が集中する様子が確認できた。

遺物包含層や浜堤面の遺構から出土した遺物は15世紀後半~16世紀にかけてのものである。上層の溝や井戸、土坑、整地層の一部からは18世紀代の染付などが出土した。第2遺構面の灰白色砂面の浅い窪みや表層の土壤化した部分からは小片ながら12世紀後半~13世紀の遺物がまとまって出土している。明確でないが、付近に遺構の拡がりが予想される。

調査区南東部の第1遺構面で帶状の粘土堆積を検出し、第2遺構面では粘土の下位で礎石列を検出した。大型の礎石建物と考えられ、今回の調査で特筆される遺構である。調査区外に統一した正確な形状は不明であるが、石の配置から平面方形の建物と考えられる。建物の下層でも多数のピットを検出しておらず、先行する建物など遺構の拡がりが想定される。調査区の西側でも小振りながら礎石や礎盤と考えられる石の並びがあり、ピットと合わせ、建物などが存在したと思われる。西側を中心に少量ながら中世の瓦が出土しており、鬼瓦片や鳥食瓦の出土は付近に大型の建物の存在を想起させる。元禄期には一帯は寺町となるが、中世の開基と伝わる

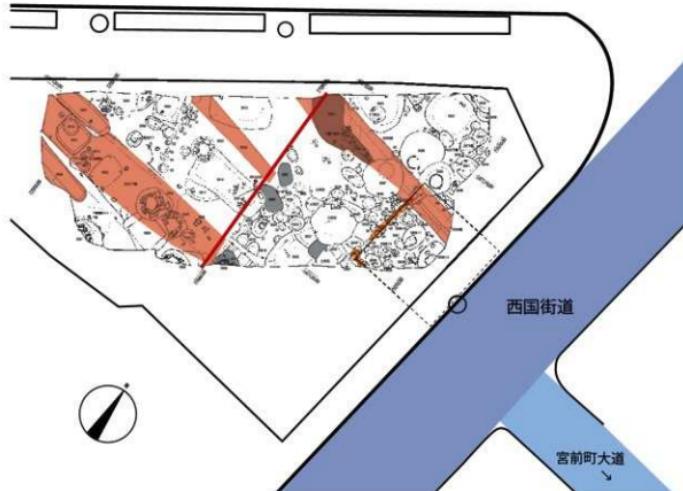


第29図 磚石による建物復元と集石遺構など
方向軸の想定 (Scale 1 : 250)

寺もあり、寺社との関連も考えられる。調査区東側の大型の礎石建物の検出は西国街道の整備との関連が考えられる。

元禄絵図はこれまでの調査成果から非常に精度の高い絵図であることが知られる。調査地は岡方の木戸町と木場町の町境にあたり、絵図ではこの部分には町境の線が描かれるのみである。残念ながら今回の調査区内には江戸時代前期の遺構面はほとんど残っておらず、絵図が描かれた時期の境界についてはSD01がその痕跡の可能性が考えられたが、明確にならなかった。ただ宮前町大道とその延長にある東西街路の痕跡と方向を同じくする溝SD01・04、溝状遺構SD02を検出している。SD04は15世紀後半～16世紀前半頃の境界に伴う溝の可能性がある。調査区中央では立石を検出した。絵図の境界線と遺構の密集度が変化する集石遺構が並ぶ南北の軸が交わる地点に位置しており、この立石も境界を明示するものと想定される。

今回の調査地南東での第70次調査で近代～近世初頭に相当する第1～6遺構面では宮前町大道から続く街路の痕跡が検出されていた。その下層の第7遺構面は元禄期以前と考えられる生活面で街路の下にも町屋遺構が拡がる状況が確認されていた。今回の調査では調査区の東端で礎石建物を検出しており西国街道側に続いている。検出範囲内での形態から建物を復元するとおそらくは西国街道の痕跡である東側現道の歩道部分までに収まるものと想定される。Ⅲ区北側でカマドが構築される整地層の状況などと合わせると16世紀代の建物と考えられる。この建物の下層で土坑やピットを多く検出しており、現道の下に拡がる可能性は高い。元禄絵図に描かれる街路はほとんどが現道に踏襲されている。当時の街路幅の確認は難しいが、遺構の検出状況から今後、細部の復元が必要となる。



第30図 西国街道・宮前町大道と調査区溝状遺構にみる方向軸の想定 (Scale 1 : 250)

今回の調査で検出した遺構の方向性や並びを第29・30図に示した。元禄絵図の西国街道や宮前町大道と直交、または並行する軸線の存在が認められる。兵庫津の町割りは中世の様相を色濃く残すものとされている。その範囲は明らかでないが、今回の調査地周辺では元禄期以前にも同様の町割りや方向性があったと考えられる。現在も旧西国街道は周辺よりわずかながら地盤が高く、地形的に安定した部分に街道を通したことなども考えられよう。



写真70 宮前町大道を見通す
(SX08構築時のSD04・SX09の痕跡：西から)



写真71 宮前町大道を見通す
(SD04検出状況とSX08-11・12礎石：西から)

礎石建物の復元

調査区東端で大型の礎石建物を検出した。今回の調査で特筆される遺構である。建物はSD04を埋め立て、SX08の礎石列を配して石の上面に帶状に粘土を張って土台としたと考えられる。建物北西のSX02やSD04（西）など周辺の雀みを粘土や石を混じえて埋め立て、その上を黄灰色粘質土で整地を行ったと考えられる。埋め戻し面にはSX09とした石が露呈する部分もある。粘質土の堆積の上面には筋状の粘土が見られ、建物の壁材や区画に伴う痕跡の可能性がある。カマドSX06はこの整地面で検出した。SX02やSD04、SX08の建物内側の埋土からは精良な土を用いた手捏ねの土師器の小皿が出土している。SD01ではまとまって出土しており、地鎮などに用いられた可能性が考えられる。

建物礎石に粘土を張る例は第14次調査や第53次調査など近隣の調査地で確認されている。また礎石を多用する構造の倉庫とされる建物が第13次調査や第14次調査で検出されている。写真73に示す第14次調査の建物は、16世紀前半頃の構築と考えられる第13次調査の建物に似た構造である。時期により異なるようだが、礎石の数、配列や間隔、また粘土の有無や使用した場合の位置、内部の礎敷きの有無など形態は様々である。今回検出したSX07・08は建物の中軸と考えられる位置の東西に大型の礎石が配される点が特徴的である。今のところ倉庫と想定しているが、堂宇など別の性格の建物の可能性なども含め、類例の増加を待ちたい。



写真72【参考】第53次調査第2遺構面SB202の粘土張りの状況
今回検出したSX07・08と異なり礎石上を除く部分に粘土が張られ、内側に砂利敷きがある。
倉庫と推測される建物である。



写真73【参考】第14次調査第6遺構面SB601
倉庫と考えられる磁石建物が検出されている。

写真74 SD04・SX08礎石断ち割り断面（西から）
礎石建物SX07・08はSD04を埋め戻して構築されている。
周辺に粘質土の堆積は認められた。

立石の検出

今回、調査区中央付近で立石を検出した。標柱状の石である。元絵図から復元される町境があつたと推定される宮前町大道の延長上線と、遺構が集中する調査区東側から希薄になる中央部分への境、集石遺構が並ぶその傍で検出した。石は礎石とは考えにくい形状であり、調査区内ではこれに対応する同様の石は確認していない。何らかの境界を示すものと現状では考えている。

今回の調査地南西で実施した第70次調査では町屋建物の境を示すものと考えられる2基の石が並び立つ状況を確認している。第75次調査でも同じく町屋建物の敷地、あるいは建物内の空間を仕切るように並び立つ2石を検出している。



写真75 SK14西側検出の立石（南東から）

何らかの境界を表す標石のような石の検出により、土地境界や建物敷地などを想定する上でヒントになる可能性がある。元禄絵図は非常に精度が高く、正確な絵図である。このような石の検出例はまだ少なく、石の性格についての検討が前提ではあるが、今回の検出状況を考えると土地境界を示す可能性が高く、区画など様々な形態の復元に役立つものと考えられる。これについても検討材料の増加を待ちたい。



写真76【参考】第70次調査Ⅰ区第4遺構面



写真77【参考】第70次調査第4遺構面SK405立石



写真78【参考】第75次調査第3遺構面



写真79【参考】第75次調査第3遺構面SX303立石

また時代は違えども現代の街中でも境界を示す様々な形態の標石が見られる。石標は今でも重要な建造物や境界に設置されている。



写真80【参考】左：旧神戸居留地15番館の敷地西側、隣地16番地との境界煉瓦塀の石柱。

番号を刻む。

中・右：兵庫区新聞地。旧緊楽館の敷地を示す標石。



中世の遺構

土師器皿出土遺構

兵庫津遺跡での調査では、工事による文化財への影響範囲が下部に及ばない場合もあり、中世の遺構面の調査が十分に実施できる状況に至らないことも多いが、今回の調査と同様、湧水の影響は遺構・遺物の検出を困難にしている最大の要因と思われる。近年は遺構・遺物の検出例が増えており、様々な状況が確認されている。中世の遺構が濃密に分布する範囲も少しづつ明らかになっており、元禄絵図に描かれる岡方、北浜地区の北半部を含めた兵庫津遺跡の北半、北西部を中心とした範囲での調査で多くの遺構・遺物が検出されている。古くからの砂堆や自然堤防など安定した地盤が微高地を形成していたものと推測される。今後は旧地形の復元も重要な課題であろう。

また中世期の遺構面の湧水については、大規模調査となった第62次調査など比較的広い調査面積の調査地においては湧水も少なく、遺構検出に支障が生じない場面がみられた。遺構が形成された中世の段階の生活面では過剰な湧水はなかったかと推測される。湧水の多い箇所もあるだろうが、常に水が滲むような軟弱な地盤ばかりではなかったであろう。

兵庫津遺跡の中世の遺構面では前述した倉庫と考えられる礎石建物などが検出されている。中世の特筆される遺構であるが、このほかに検出例の多い遺構として、土師器皿がまとまって出土する土坑がある。



写真81【参考】

左上：第53次調査第10面SP1007

土坑から皿が数点～十数点出土するものが多い。

右上、右下：第74次調査SX02

土師器皿を積積した土坑が保管された場所と考えられる。下層には皿が積まれた箇所が多く見られ、集積（収納）されていたものと想われる。最上層から出土した皿は細片が多く、最終的には投棄場所となったようである。

調査地は元禄絵図では寺町、律宗妙福寺境内に位置する。前身となる寺院などで使用されたものであろうか。

このような遺構が検出される場所は元禄期には寺社が描かれる場所が多いように思われるが、検討をする。



今回の調査では土坑からまとまった数の土師器皿の出土はなかったが、兵庫津遺跡の北西部での調査、寺町周辺での調査では同様の遺構が多数検出されている。土師器皿の出土状況から投棄、埋納（祭祀）、集積など土師器皿の使用目的、土坑の性格について検討されている。

今回検出の土坑からの皿の出土数は少ない。破片で出土するもの、完形で出土するもの両方が見られた。わずかに灯明皿としての使用痕が認められるものもある。今回検出のものは出土状況からほとんどが遺構廃絶時の投棄の可能性を想定している。

中世当時の兵庫津の地形、また港や関連する施設、町屋の位置や配置などを検討する上では今後、これら中世の遺構・遺物の出土状況、出土地点のデータを蓄積することが必要である。また土師器皿が多く出土する土坑と同様に中世、さらに近世の遺構で集石遺構が占める割合も大きいと思われる。遺構の性格、用途についてあまり論じられていない。今回も調査区東半の遺構の密度が高い部分から中央の希薄な部分へと変化する、その境となる位置で検出しており、注目すべき点と考えている。配置に意味があるように考えられるが、現状では根拠に乏しく、これについても今後、検討が必要である。

最後に

今回の調査では古代末～近世に至る遺物が出土し、15世紀後半及び16世紀～17世紀前半頃の多数の遺構・遺物を検出した。15世紀後半、兵庫津は戦乱により荒廃したとされていたが、近年の調査では同時期の遺構・遺物が多く検出されており、その背景について検討が必要と思われる。礎石建物など大型建物が検出される調査地は、近世には経済的地盤が強固となる地区に今のところ位置している。今後の検討材料に供する資料が今回の調査でも得られたと考えられる。検出した礎石建物の構造については明確な答えを見いだせなかった。今後の兵庫津遺跡での調査成果や他の都市遺跡の状況、類例の検討を行っていきたいと考えている。

参考・引用文献

- 神戸市立博物館「特別展 よみがえる兵庫津－港湾都市の命脈をたどる－」2004 神戸市立博物館
高久智広「近世期兵庫津北浜における浜先地開発と屋敷前の変化について」「研究紀要第18号」2002 神戸市立博物館
『兵庫津の総合的研究－兵庫津研究の最前線－』2008 大手前大学史学研究所
『兵庫津遺跡発掘調査報告書第14・20・21次調査』2010 神戸市教育委員会
『兵庫津遺跡第42次調査発掘調査報告書』2008 神戸市教育委員会
『兵庫津遺跡－第51次発掘調査報告書－』2010 神戸市教育委員会
『兵庫津遺跡－第53次発掘調査報告書－』2012 神戸市教育委員会
『兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書』2017 神戸市教育委員会
『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県埋蔵文化財調査報告第270番 2004 兵庫県教育委員会教育委員会
『概説 中世の土器・陶磁器』1995 中世土器研究会編

報告書抄録

ふりがな	ひょうごついせき だい79じ はつくつちょうさほうこくしょ						
書名	兵庫津遺跡 第79次 発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	藤井太郎(編)						
編集機関	神戸市文化スポーツ局						
発行機関	神戸市						
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL 078-322-5799						
発行年	西暦2021年3月31日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
兵庫津遺跡	市町村 兵庫県神戸市 兵庫区本町2丁目	28104	24° 40' 15"	135° 10' 27"	2019063~ 20190906	270m ² (のべ540m ²)	記録保存調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
兵庫津遺跡	集落跡	鎌倉時代 室町時代 江戸時代	礎石建物 土坑・ピット・溝 集石遺構・カマド		土師器・須恵器・瓦器・瓦 青磁・白磁 土鍬・土製円板 鉄製品・銅製品		
要約	今回の調査では中世後半～近世初頭の遺構を検出した。調査地は元禄期の絵図に示された町堀に位置するものと考えられ、検出した中世の溝などから、近世期の町割りも中世の遺構に示される方向性を搭載しているものと想定される。						
	16世紀代と考えられる大型の礎石建物1棟を検出し、その下層でも多くの中世後半の遺構・遺物を検出した。礎石建物は大型の礎石を方形に配する平面形で、倉や堂宇の可能性を考えられるが、詳細は不明である。西国街道の整備との関係は明らかでないが興味深い資料である。浜堤面や遺物包含層からは12世紀後半～13世紀の遺物が出土した。兵庫津遺跡の中世の様子を知る上で重要な調査成果である。						

兵庫津遺跡 第79次発掘調査報告書

2021.3.31

発行 神戸市文化スポーツ局文化財課
 神戸市中央区加納町6丁目5番1号
 TEL 078-322-5799

印刷 交友印刷株式会社
 神戸市中央区港島南町5-4-5
 TEL 078-303-0088

